国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2025.1

国立国会図書館デジタルコレクション
がなければ書けなかった本
濱口桂一郎

国立国会図書館デジタルコレクションの
全文検索を活用しよう！

和辻哲郎自筆稿本の世界
―「和辻倫理学」の源泉をもとめて

765号　2025年1月

新年のごあいさつ

国立国会図書館長　倉田　敬子

謹んで新年のお慶びを申し上げます。本年が皆さまにとって良い年となりますようお祈り申し上げます。

昨年4月に国立国会図書館長に就任し、早いもので9か月が過ぎました。図書館情報学分野の研究者として、国立国会図書館の活動や役割は理解しているつもりでおりましたが、実際に館長になってその日々の活動に接してみますと、その活動の幅広さ、多様さに改めて驚かされております。

「国立国会図書館ビジョン2021-2025 -国立国会図書館のデジタルシフト-」は今年4月から最終年度に入ります。このビジョンでは7つの重点目標、4つの基本的役割を掲げてきましたが、特にビジョンのタイトルにもあります「デジタルシフト」については大きな成果をあげつつあります。

令和2年度以来毎年度の補正予算により、当初の「5年間で100万冊以上の所蔵資料のデジタル化」という目標は既に大きく超え、1969年から2000年までに受け入れた国内刊行図書のデジタル化点数は、今年度中には累計で145万冊に達する見込みです。令和6年11月時点で、当館のデジタル化資料423万点のうち、インターネットで公開中の資料は64万点、デジタル化資料送信サービスを通じて提供可能な資料は203万点にまで拡大いたしました。

「デジタルシフト」は、紙の出版物のデジタル化だけを指しているわけではありません。資料は探し出せなければ利用できませんので、当館をはじめ他の図書館等でも、所蔵資料には著者名、書名、出版社名などのメタデータを付与して検索できるようにしてきました。昨年1月にリニューアルした統合的な資料検索システム「国立国会図書館サーチ（N

ＤＬサーチ）」では、当館のメタデータだけでなく、他の機関が作成しているメタデータもまとめて検索でき、紙の出版物を探すだけでなく、様々なデジタルコンテンツへのアクセスも可能です。

ＯＣＲ処理による全文テキスト化も進めており、国立国会図書館デジタルコレクションでは、約３００万点のデジタル化資料の全文検索が可能となっています。また、全文検索でヒットした検索語の位置を画像上にピンで表示することで、探したい情報をすぐに見つけられるようにする仕組みも導入しました。

このように、「デジタルシフト」を進めることで、より多くの資料に関して便利に利用していただける状況を構築しつつあるのではないかと考えております。出版社、著者の皆さま、連携協力していただいている機関の皆さまをはじめとして、ご理解、ご協力をいただいた方々に御礼申し上げます。今年は、この現在のビジョンでの活動を総括したうえで、次期ビジョンに向けての検討を本格化させていく時期となります。

「デジタルシフト」の次のビジョンをどう考えていけばいいかはチャレンジングな課題です。その一助とすべく、当館と似た機能を持つ米国議会図書館の首席副館長Ｊ・マーク・スウィーニー氏を迎えてシンポジウム「デジタルシフトの次へ―米国議会図書館の新戦略から見えてくるもの―」を昨年９月に開催いたしました。スウィーニー氏には米国議会図書館の戦略計画について基調講演を行っていただくとともに、一橋大学大学院教授の只野雅人氏、情報・システム研究機構長の喜連川優氏、国士舘大学特任教授の溝上智恵子氏にパネリストとして加わっていただき、国立国会図書館の果たすべき役割についてパネルディスカッションも行いました。

知識とは、人間の身体も含めた広い意味の認知活動の結果生み出されたもので、何らかの制度、システムによって社会の人々に流通し、社会活動と次の知的生産活動の源となるものです。現在、その知識の表現形式、流通制度ともに大きな変化を迎えています。国立国会図書館の基本的な役割とは、伝統的な紙の出版物とデジタルで生み出され流通する多様な情報とを統合した知の基盤を最大限活用して国会活動を補佐するとともに、より多くの人々にその基盤を利用していただくことを通じて、豊かな社会の形成に貢献していくことであろうと思います。この基本的な役割は変わりませんが、それを実現するための方法にまだ正解はありません。次期ビジョンの策定も含め、これからも国立国会図書館としての役割を果たすべく模索を続けてまいりたいと思います。

国立国会図書館月報

NO. 765
JANUARY 2025

CONTENTS

新年のごあいさつ

3 『理科年表 第一冊』
―百年の歴史 はじまりの一冊―
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

8 国立国会図書館デジタルコレクション
がなければ書けなかった本
濱口桂一郎

14 国立国会図書館デジタルコレクションの
全文検索を活用しよう！

16 和辻哲郎自筆稿本の世界
―「和辻倫理学」の源泉をもとめて

27 数字で見る国立国会図書館

24 館内スコープ
オリジナルのカードをどうぞ

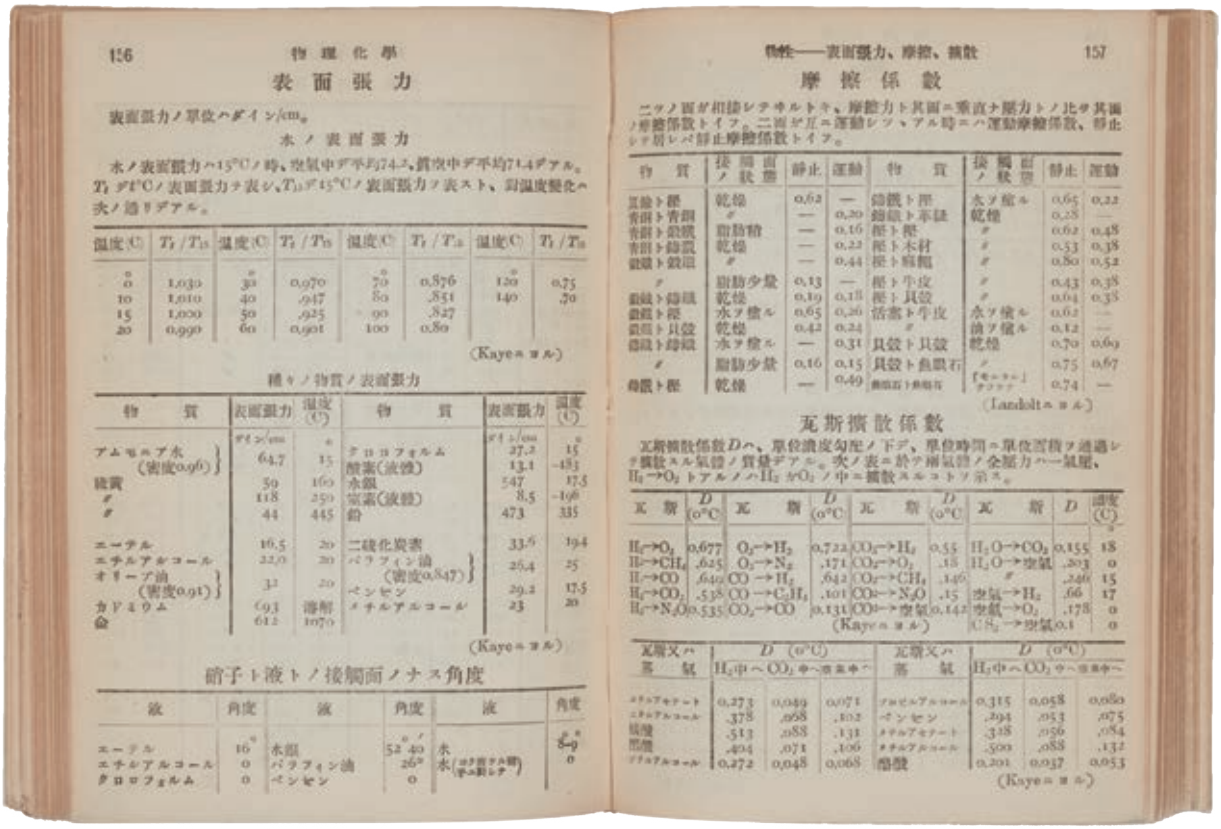
25 本屋にない本
『おいしい浮世絵展 北斎 広重 国芳たちが描いた江戸の味わい』

26 NDL Topics

表紙：浅井忠「孫叔敖」
『ホトトギス』8巻4号
ホトトギス社 1905.1 21cm
https://dl.ndl.go.jp/pid/7972214/1/4

『理科年表　第一冊』— 百年の歴史 はじまりの一冊 —

落合 翔



『第一冊』の典型的な見開き紙面。自然科学に関するデータがびっしりと印刷されている。

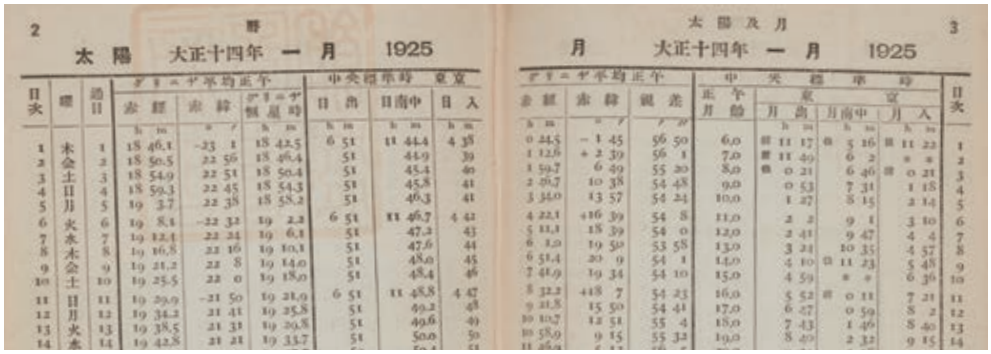
『理科年表　第一冊（大正14年）』
東京天文台編　東京帝国大学　1925年
https://dl.ndl.go.jp/pid/977669（モノクロ画像）

理科年表は、自然科学のあらゆる分野の基礎的情報を網羅したデータブックである。学校の授業で理科年表のページを繰り、課題をこなした記憶のある方もおられよう。もちろん、われわれ図書館員もレファレンス業務において重宝しており、科学の調べ物をする利用者へ理科年表を紹介することも少なくない。

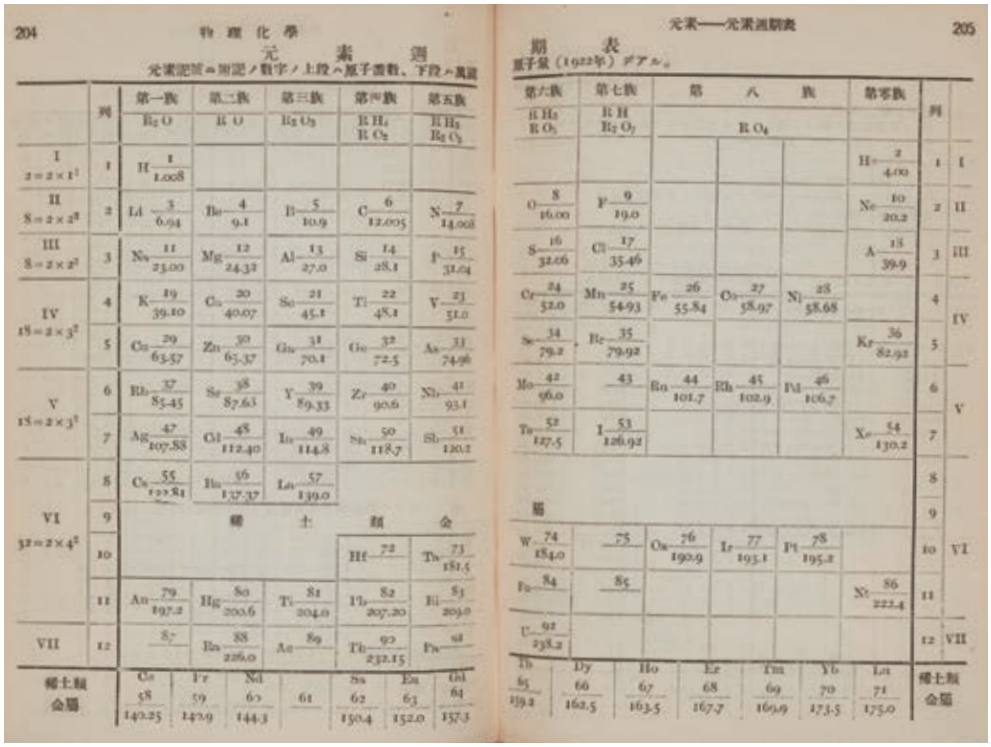
理科年表は年に1回刊行されており、本年は刊行開始から100年目に当たる。本記事では、その歴史の幕開けとなった『第一冊』（大正14（1925）年版。理科年表では創刊号からの数が「第〇冊」と示される。）を見ていきたい。

『第一冊』は「暦部」から始まる。ここでは、大正14年の1月から12月まで、日々の日の出・日没の時刻、月の満ち欠けに関する情報などが一覧化されている。1年を通じての惑星や北極星の動きもまとめられている。100年前の読者は、その日その日の天空の状態を、この一冊で簡便に確認できたことだろう。

また「天文部」では各種天体や星座などの情報が、「気象部」では世界や日本各地の気温、降水量、初雪の日などの情報が整理されている。「物理化学部」では、様々な物質の性質や構成を表す値などが一覧できる。「地学部」では、世界の国や都市の人口、おもな海洋、



『第一冊』の「暦部」の冒頭部分。左ページに大正14（1925）年1月の日々の太陽の情報が、右ページに月の情報がまとめられている。



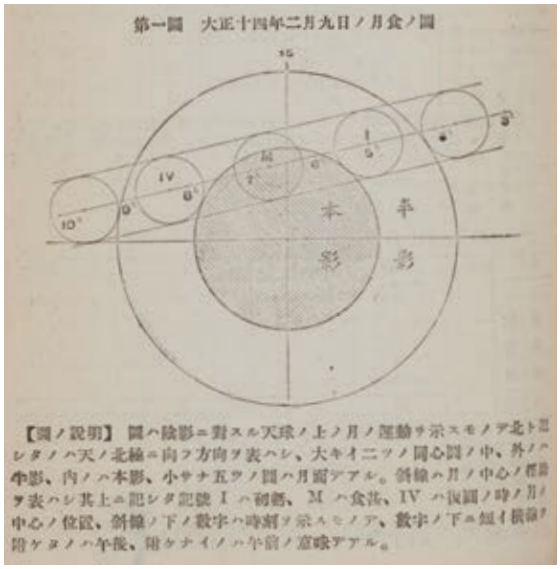
『第一冊』に収められている元素周期表。現在の理科年表では120種類近く示されている元素記号も、まだ87種類しか見られない。この短周期型周期表は、理科年表においては『第三十冊』（1957（昭和32）年版）まで掲載されているが、その翌年からは「従来の短周期型にみられる諸種の欠陥を補うものとして推奨に値する」として、現在広く知られている「長周期型周期表」が採用された。

山岳、河川などの大きさ、岩石・鉱物の性質、過去のおもな地震といったものを調べることができる。

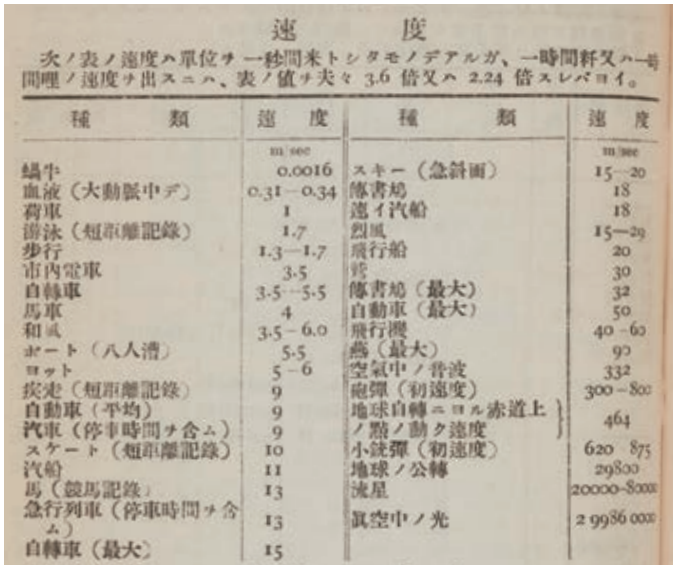
こうした情報は、現在に至るまで、毎年の理科年表に掲載され続けているものである。しかし、各部を細かく見ていくと、いまと昔の内容に違いを確認することもできる。たとえば、元素を一覧する「周期表」は、現在よく知られているものと異なる、横幅の狭い形式のもの（短周期型周期表）が収められており、当時は元素の標準的な整理のしかたが現在と異なっていたことがわかる。このように、「100年前の最新科学」に触れる気持ちでデータや図表を眺めてみるのも、『第一冊』の楽しみ方のひとつである。

理科年表はどういった経緯で誕生したのだろうか。

理科年表を創刊した東京天文台（現・国立天文台、当時は東京帝国大学に附属）の人々は、『第一冊』で見られるような内容をはじめから計画していたわけではなかったようである。東京天文台で当初構想されていたのは、天体観測に利用される本格的な天体暦（太陽、月、惑星の位置などを理論的に計算・予報し一覧化したもの）だった。それまで日本では、膨大かつ高度な計算を要する天体暦編纂のた



「月食の図」も現在の理科年表には掲載されていないものである。この図では、黒い円が地球によって太陽光が完全に遮られる影を表しており、小さい円で示される月がその影を右から左に横切っていく様子が示されている。3から10の数字は時刻（時）であり、午前5時頃から部分月食が始まり、6時45分頃に最大となることがわかる。この図と明け方の空を見比べながら、大正14（1925）年2月9日に実際に部分月食を観察した人がいたかもしれない。この形式の図は『第三十四冊』（昭和36（1961）年版）まで見られる。

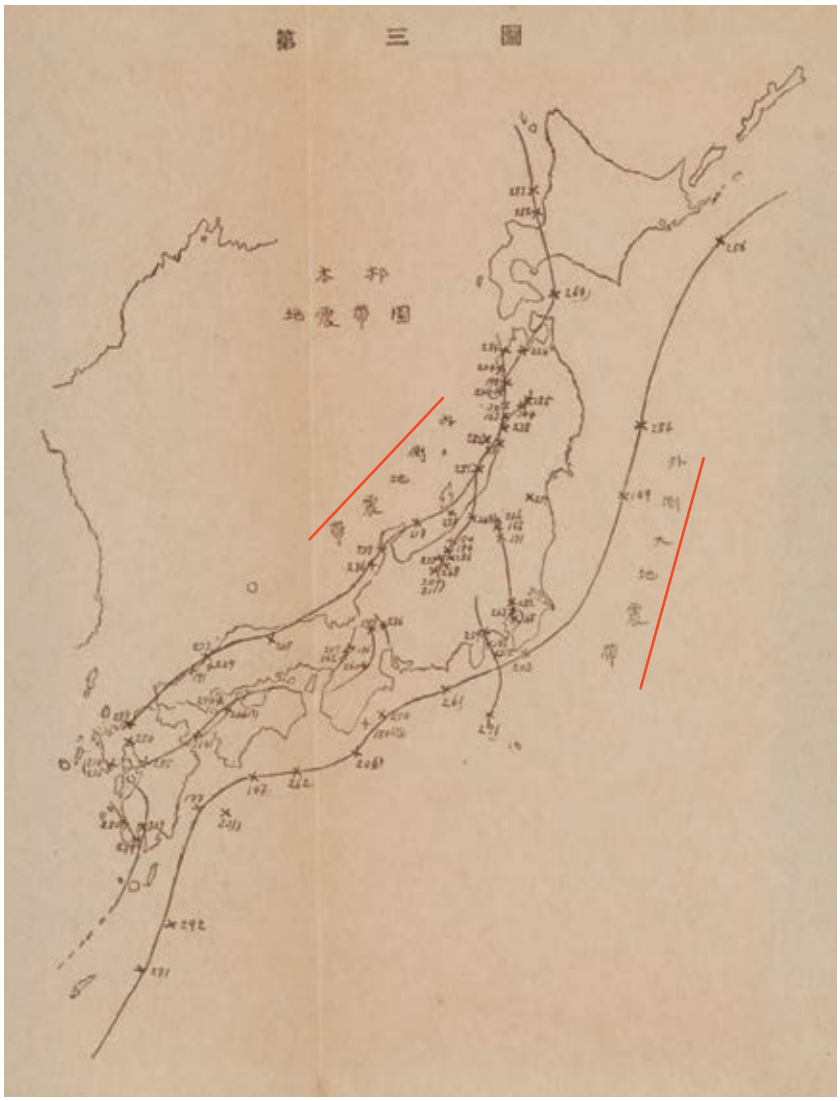


速　度

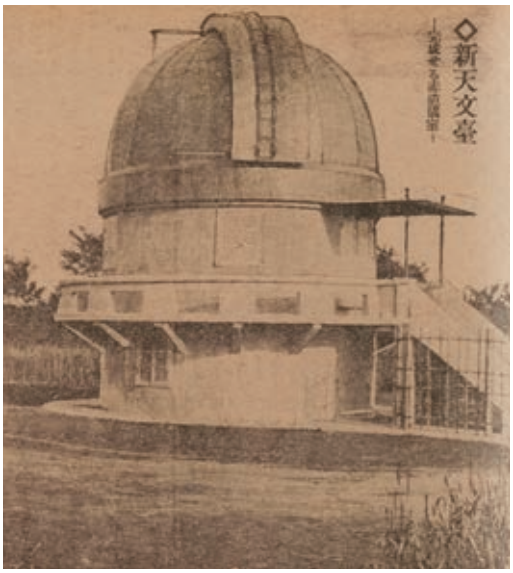
次ノ表ノ速度ハ單位ヲ一秒間米トシタモノデアルガ、一時間粁又ハ一時間哩ノ速度ヲ出スニハ、表ノ値ヲ夫々 3.6 倍又ハ 2.24 倍スレバヨイ。

種類	速度 m/sec	種類	速度 m/sec
蝸牛	0.0016	スキー（急斜面）	15—20
血液（大動脈中デ）	0.31—0.34	隼	18
荷車	1	蒸汽船	18
游泳（短距離記錄）	1.7	烈風	15—29
歩行	1.3—1.7	飛行船	20
市内電車	3.5	鷲	30
自轉車	3.5—5.5	隼（最大）	32
馬車	4	自動車（最大）	50
和風	3.5—6.0	飛行機	40—60
ボート（八人漕）	5.5	燕（最大）	90
ヨット	5—6	空氣中ノ音波	332
疾走（短距離記錄）	9	砲彈（初速度）	300—800
自動車（平均）	9	地球自轉ニヨル赤道上ノ點ノ動ク速度	464
汽車（停車時間ヲ含ム）	9	小銃彈（初速度）	620 875
スケート（短距離記錄）	10	地球ノ公轉	29800
汽船	11	流星	20000-80000
馬（競馬記錄）	13	眞空中ノ光	299860000
急行列車（停車時間ヲ含ム）	13		
自轉車（最大）	15		

『第一冊』には、現在の理科年表には見当たらないような形で整理された情報もある。たとえば上図は、カタツムリ（蝸牛）から光まで、世の中の様々な速度をランキング形式で紹介する興味深いページであり、『第十三冊』（昭和11（1936）年版）まで掲載されていた。単位はメートル毎秒である。馬車や伝書鳩といった歴史を感じられる項目も含まれているが、当時はこれらも実用的な情報だったのだろう。



『第一冊』では約300件の過去の大地震の情報が整理されており、その震源をプロットした「本邦地震帯図」も綴じ込まれている。太平洋側に「外側大地震帯」、日本海側に「内側地震帯」と示される線が震源に沿って結ばれているが、これらの用語は現代の地震学においてはほとんど用いられなくなった。なお、図のような地震の分布を説明しうるプレートテクトニクス理論が確立したのは、40年ほど時代を下った1960年代後半であり、理科年表にプレートテクトニクスに関連する説明が登場するのは『第五十九冊』（昭和61（1986）年版）からである。

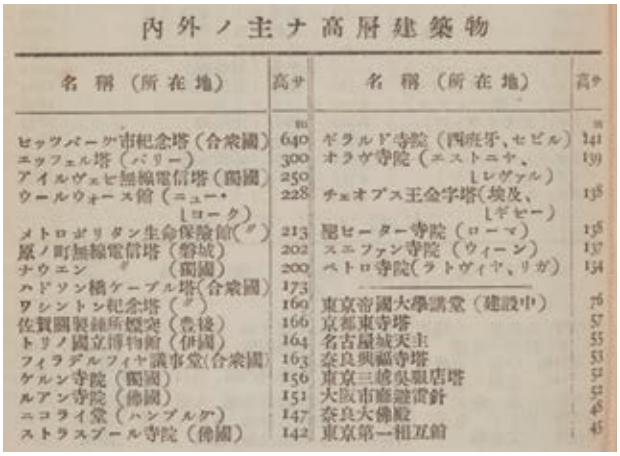


天文暦の独自編纂の構想がなされていた時期は、東京天文台による天文観測体制の拡充が進められた時代に重なる。かつて東京・麻布にあった東京天文台は、大正13（1924）年にいまの所在地である三鷹へ移転することとなり、広大な敷地に大掛かりな設備の整備が進められていた。写真は東京天文台の移転に当たって建てられた観測設備の1つ「赤道儀室」の当時の様子であり、ドーム内に設置された望遠鏡で太陽を観測していた。

（写真出典）「武蔵野の一角に新築天文台」『東京朝日新聞』1921.6.6, 3面　<Z81-1>

海軍水路部（海上保安庁海洋情報部の前身）による天体暦『天体位置表』の第一冊目の冒頭部分。理科年表の「暦部」よりも細かく専門的な、日々の太陽のデータが並んでいる。『天体位置表』は戦後、海上保安庁が受け継いで毎年刊行していた。しかし、平成22（2010）年で終刊となり、結果的に、天体暦の予算が当初認められなかった理科年表のほうが永く刊行され続けることとなった。

（図版出典）『天體位置表　昭和18年』水路部, 1942, p.2　https://dl.ndl.go.jp/pid/10304773/1/8



『第一冊』を注意深く読んでいくと、まだまだ興味深い点を多く見つけることができる。例えば、「地学部」の「内外の主な高層建築物」の一覧には、現代の東京スカイツリーに匹敵するほどの高さの「ピッツバーグ市紀念塔」（640メートル）という信じがたいものが記されている。このような建物は実在していないが、この記述をもとに当時の現地の新聞等を調べてみると、現実的に可能であったかは別として、そうした超高層タワーの建築計画が確かに議論されていたようである*。この表をまとめた編纂者は、遠い海外の細かい動向まで収集していたのだろう。

「原ノ町無線電信塔」（202メートル）や「佐賀関製錬所煙突」（166メートル）といった、かつて日本に存在していた、当時における巨大建築物が掲載されているのもわくわくする。これらはそれぞれの建築当時、世界で一二を争う高さを誇るものだったようだ。

また、「東京帝国大学講堂（建設中）」（76メートル）という気になる記述もある。『第一冊』の刊行直後に竣工した現・東京大学のいわゆる安田講堂は、実際には高さが40メートル弱しかない。筆者の調べの限りでは、実はその約2倍もの高さまで建設される予定だった、といったような事実は確認できなかったものの、そんな幻の計画があったのだろうか、と思いを巡らすのもおもしろい。

なお、この表は『第三十七冊』（昭和39（1964）年版）を最後に掲載されなくなったが、最新の『第九十八冊』（令和7（2025）年版）では超高層ビルの高さ等を示した表「世界と日本における最大規模の人工構造物・掘削」の掲載が始まった。

＊ “Plan Tallest Memorial,” *Harrisburg Telegraph*, 1919.6.19, p.16; “Tower 2,000 Feet High will be Pittsburgh’s Memorial to Yankees,” *Washington Times*, 1919.6.21, p.19

めの技術や体制が整っておらず、欧米から輸入した天体暦に頼らざるを得ない状況が続いていたが、これを東京天文台で、国内で初めて独自に編纂する気運が高まっていたのである。

一方、当時の航海では、天体の観測により海上で自分の位置や針路を確認しており、それに用いる目的で、海軍省でも天体暦を編纂する計画が同時期に進行していた。両組織が予算獲得を競い合った結果、天体暦の編纂は海軍省が実施することとされ、東京天文台は小規模な天体暦（「暦部」に相当）を含む理科年表を刊行することとなった。

これは東京天文台にとって、不本意な決定であったことだろう。しかし、こうした経緯があったからこそ、天文学にとらわれない内容を含み、教育の現場などでも広く用いられる理科年表が誕生したのではないだろうか。そうした意義は創刊当初から早々に見出されていたようであり、たとえば、日本天文学会が刊行する『天文月報』では、刊行直後の『第一冊』について「天文学、気象学、物理学、化学、地理学、地文学等に関係した教育者並に研究者にとって座右に備えて便利なものであろう。[1]」と紹介されている。また、『第一冊』刊行の年の『東京帝国大学要覧』では、東京天文台による理科年表の編纂について「是れ

理科年表をつくった人

大正12（1923）年、東京天文台に理科年表係が設置され、技師・神田茂（1894-1974）がその主任となった。神田は理科年表の刊行初期の中心的人物であり、『第一冊』から『第十二冊』（昭和11（1936）年版）まで編纂に携わった。写真は理科年表の編纂が計画されていた頃の神田である。細かい作業を好む人柄であった神田は、情熱と喜びを持って、理科年表の原稿と日々向き合っていたと伝えられている。

しかし、第二次世界大戦の末期になると、東京天文台の職員は各自の研究や観測を中断させられ、軍事的にも必要とされる暦の計算に総動員されることとなった。神田はそうした方針に反対した結果、東京天文台を罷免されてしまうこととなる。終戦前年には、戦時の出版事情により、理科年表の刊行も中断されてしまった。

ただ、それでも神田の理科年表に対する思いは消えなかったに違いない。神田は東京天文台を離れた後も、研究者として、さらにアマチュア天文学の指導者として長く活躍したが、戦後に神田が著した教科書を見てみると、正確な天文学的数値の参照先として、『第二十冊』（昭和22（1947）年版）から刊行を再開した理科年表を参照するよう勧める例が見当たる[*1]。また、理科年表の掲載内容の妥当性を論じ、修正を具申する論文を多数発表、それを受けてとみられる修正が実際になされるなど[*2]、外部の立場から理科年表の改良・発展に貢献していたようである。

理科年表がこうした科学者の情熱に支えられ、生まれ、100年間受け継がれてきたと考えると、ただでさえ厚い現在の理科年表の重みが、いや増して感じられる。

（写真出典）「天文台の新理学士が銀河に近く新星発見」『東京朝日新聞』1920.8.24, 5面　<Z81-1>

＊1　神田茂『天文学概説』恒星社厚生閣, 1952　https://dl.ndl.go.jp/pid/1370771
＊2　神田茂「理科年表の日本大地震表について」『地震』2輯21巻2号 日本地震学会, 1968.8, pp.141-142　<Z15-199>

本台の事業上最も必要の事なりとす」[2]とまで述べられている。

こうして刊行がはじまった理科年表は、昭和59（1984）年には構成に「生物部」が加わり、さらに広範な分野をカバーした。平成17（2005）年には時代の要請に応え、「環境部」が新設された。その後も毎年、データの更新や追加がなされながら、理科年表は進化を続けている。しかし、いまも昔も人々に科学の正確なデータを提供し続けていることは変わらない。その営みは、これからも永く続いていくことだろう。

1　「雑録　理科年表」『天文月報』18巻3号 日本天文学会, 1925.3, p.41　https://dl.ndl.go.jp/pid/3304056/1/5
2　東京帝国大学編『東京帝国大学要覧　従大正十三年　至大正十四年』東京帝国大学, 1925, pp.260-261　https://dl.ndl.go.jp/pid/1838186/1/139

○参考文献
『東京天文台90周年誌―沿革と展望―』東京天文台, 1968 https://dl.ndl.go.jp/pid/2429889
斎藤国治ほか「神田茂先生を悼む」『天文月報』67巻11号 日本天文学会, 1974.10, pp.333-341　https://dl.ndl.go.jp/pid/3304630/1/4
東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史　部局史　三』東京大学出版会, 1987　https://dl.ndl.go.jp/pid/12113777
『理科年表　番外編』丸善出版, 2015（『理科年表　第89冊（平成28年）』附録）　<Z43-469>
中島林彦「日本最初の理科年表」『日経サイエンス』47巻12号 日経サイエンス, 2017.12, pp.96-99　<Z14-529>
「學鐙」編集室「『理科年表』について」『學鐙』118巻4号（2021年冬）丸善出版, 2021, pp.54-55　<Z21-176>

※引用の旧字は新字に、旧かなづかいは現代かなづかいに改めた。片仮名も適宜平仮名に改めた。
※＜＞内は当館請求記号

国立国会図書館デジタルコレクションがなければ書けなかった本

濱口桂一郎
Hamaguchi Keiichiro
労働政策研究・研修機構労働政策研究所長
1958年大阪府生まれ。1983年東京大学法学部卒業、同年労働省に入省。欧州連合日本政府代表部一等書記官、衆議院調査局厚生労働調査室次席調査員、東京大学客員教授、政策研究大学院大学教授を経て2017年から現職。『労働法政策』（ミネルヴァ書房、2004）、『新しい労働社会――雇用システムの再構築へ』（岩波新書、2009）、『働く女子の運命』（文春新書、2015）、『ジョブ型雇用社会とは何か――正社員体制の矛盾と転機』（岩波新書、2021）、『新・EUの労働法政策』（労働政策研究・研修機構、2022）、『家政婦の歴史』（文春新書、2023）、『賃金とは何か――職務給の蹉跌と所属給の呪縛』（朝日新書、2024）など著書多数。

続々見られる資料が増えている「国立国会図書館デジタルコレクション」。労働政策研究の第一人者である濱口桂一郎さんは、家政婦の歴史を調べる過程で「恐る恐る」デジタルコレクションを使い始め、あれこれ見ていくうちにその威力を知るに至ったといいます。一昨年上梓された話題書『家政婦の歴史』執筆の過程において、実際にどんな風に使ったのかを寄稿していただきました。

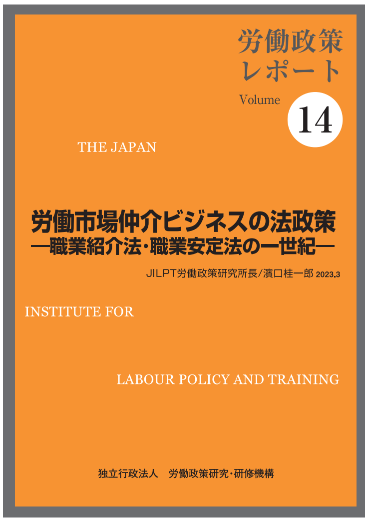
『家政婦の歴史』文春新書，2023年7月刊

序　章　ある過労死裁判から
第1章　派出婦会の誕生と法規制の試み
第2章　女中とその職業紹介
第3章　労務供給請負業
第4章　労務供給事業規則による規制の時代
第5章　労働者供給事業の全面禁止と有料職業紹介事業としてのサバイバル
第6章　労働基準法再考
第7章　家政婦紹介所という仮面を被って70年
第8章　家政婦の労災保険特別加入という絆創膏
第9章　家政婦の法的地位再考
終　章　「正義の刃」の犠牲者

2023年7月、文春新書から『家政婦の歴史』という本を出しました。これまでジョブ型のメンバーシップ型だのといった雇用システムの話ばかり書いていたので、「妙な本を書いたなあ」と思われたようです。でも、読まれた方からはX（旧Twitter）上で、「これはめちゃくちゃ面白い」とか「法の盲点を突く著作で面白かった」といった感想もいただき、ほっとしていました。とりわけ、労働研究者の本田恒平さんが「濱口さんの圧倒的な文献研究で、労働者供給の歴史の点と点が繋がり、霞が晴れていくような感覚。一見地味なテーマだけど、濱口作品の中で一番好きだった。一番震えた」と書いていただいたときは、うれしいと同時にこそばゆい思いが駆け巡りました。というのも、褒められた「圧倒的な文献研究」というのは、私が勤務する労働政策研究・研修

有料職業紹介事業の改正をめぐって
―家政婦の職種指定など―

『職業安定広報』2(12), 1951年12月
https://dl.ndl.go.jp/pid/2732793/1/15



『労働政策レポートNo.14 労働市場仲介ビジネスの法政策―職業紹介法・職業安定法の一世紀―』2023年3月
https://www.jil.go.jp/institute/rodo/2023/014.html
（独立行政法人労働政策研究・研修機構ウェブサイト）

機構（ＪＩＬＰＴ）の労働図書館の蔵書と、なによりも国立国会図書館のデジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）のおかげだったからです。

本書を書く直接のきっかけは、「はじめに」に書いたとおり、２０２２年９月29日に東京地裁が家政婦の過労死事件について、家政婦は家事使用人だから労働基準法や労災保険法の適用を受けないという判決を下したことにあります。この判決に賛否両論ある中でも、そもそも家政婦は家事使用人だったのか？という疑問を呈する人は一人もいませんでした。私がそこに疑問を感じたのは、「あとがき」に書いたように、ちょうどその前後に日本の労働市場仲介ビジネスの歴史をまとめつつあったためです。

これは、２０２２年３月の職業安定法改正を契機にして、これまでまとまった研究書の存在しないこの分野に、資料集的な意味も含めて通史を書こうとしたもので、２０２３年３月に『労働政策レポートNo.14 労働市場仲介ビジネスの法政策―職業紹介法・職業安定法の一世紀―』（労働政策研究・研修機構）として公表しています。江戸時代の紹介業者千束屋（ちづかや）から始まって、20世紀前半に人材ビジネスが次第に規制・禁止されていき、20世紀後半に次第に規制緩和・自由化されていく政策プロセスを、膨大な資料をほぼそのまま掲載しつつ描きだしたもので、Ａ４判３９４頁の分厚いレポートです。そのとき主として用いたのは、私が勤務するＪＩＬＰＴの労働図書館の蔵書でした。戦後の労働行政に関わる書籍や雑誌、資料の類いはほぼ揃っており、戦前の資料もごく一部ですが収蔵されています。

このレポートを書いているときに目に飛び込んできたのは、１９５１年10月に家政婦が有料職業紹介事業の対象職種に追加されたときに、当時の行政広報誌であった『職業安定広報』１９５１年12月号に、「看護婦並びに家政婦の職業紹介は職業紹介法に基く『労務供給事業規則』で規制されていた。昭和二十三年三月、職業安定法の施行に伴い、労働者供給事業として労働組合が労働大臣の許可を得て行う場合の外一切禁止されることとな」ったが、さまざまな問題が発生したので「職業安定法施行規則第二十四条第一項第八号の労働大臣が定める職業とし、弊害のないものに私営職業紹介事業を許可する事とした」と書かれていたことです。というのも、街のあちこちに見

かける「○○家政婦紹介所」という看板を見慣れた私たちは、家政婦というのは昔から職業紹介事業だったと思い込みがちですが、戦前から終戦直後まではそうではなかったこと、悪の権化として全面禁止されたと教えられてきた労働者供給事業であったことが、役所自身の手によってさりげなく示されていたからです。

え？　そうだったのか！

終戦直後の労働者供給事業の禁止をめぐるドタバタ劇については、ＪＩＬＰＴの労働図書館の資料を片っ端から見ていくことでほぼ全体像を描くことができました。『労働時報』『中央労働時報』『職業安定広報』『雇用研究』『職業研究』といった行政関連雑誌を始め、戦後労働行政の関係資料はかなり揃っているからです。しかし、戦前労務供給事業として行われていたという家政婦の姿はなかなか見えてきませんでした。もちろん、法令や主な通達は、『労働行政史　第1巻』（労働法令協会、１９６１）を始めとした既存の歴史書に載っていますが、具体的な細かい情報は見当たらないのです。そこで、当時「すごいらしいぞ」と噂になりかけていた国立国会図書館のデジタルコレクションを恐る恐る検索してみました。そうすると、戦前は「家政婦」という言葉よりも「派出婦」という言葉の方が一般的であったことがわかりました。そしてあれこれ見ていくうちに、戦前のある行政資料にぶち当たりました。それは、協調会に置かれた中央職業紹介事務局が発行していた『職業紹介公報』の第16号（１９２５年2月28日）でした。

同号には「東京府下に於ける派出婦会の概況」というかなり長い記事が載っており、そこには、派出婦会という新しい事業を始めたのは大和俊子（おおわ）という女性であること、羽仁もと子の主宰する『婦人之友』という雑誌でアイディアを公表し、大好評で迎えられたこと、彼女のビジネスを見て多くの人が続々と新規参入してきて派出婦の質が低下したこと、そこで彼女が音頭をとって東京聯合派出婦会を結成したことなどが詳しく書かれていたのです。これによって、戦前の派出婦会の姿がくっきりと浮かび上がってきました。これは「ログインなしで閲覧可能」な資料でしたが、「派出婦」の検索結果のかなりのものは、「送信サービスで閲覧可能」や「国立国会図書館内限定」でした。

『職業紹介公報』第 16 号 , 1925 年 2 月 28 日
https://dl.ndl.go.jp/pid/983830/1/1

とりあえずここまでの情報で、２０２２年度研究成果としての上記労働政策レポートを書き上げました。その最終段階だった２０２３年1月ごろ、たまたま以前『働く女子の運命』を出したときに担当いただいていた文藝春秋社編集部の鳥嶋七実さんとお昼をご一緒する機会があり、そこで問われるままに「あの家政婦ってのは、戦前は派出婦会といって労働者供給事業だったのが、戦後職業紹介事業になったんです。そのために家事使用人にされてしまい、労働基準法が適用されなくなってしまったんです」というようなことを喋ったのです。その数か月前に冒頭で述べた家政婦過労死事件の判決があったこともあり、「それって面白いじゃないですか。本にしましょうよ」となりました。本の企画って、そんなことで始まるの？　と思うかも知れませんが、

そんなことで始まるんですよ。

こうして、『家政婦の歴史』の執筆が始まりました。大部分ＪＩＬＰＴ労働図書館資料でまかなえた労働政策レポートと違い、こちらはデジタルコレクションの資料、とりわけ「国立国会図書館内限定」の資料を駆使しなければ書けません。まずは『婦人之友』です。今日も刊行され続けているこの雑誌には、羽仁もと子による事業の紹介や宣伝が繰り返し載っています。大和俊子が派出婦会を始めた１９１８年は新型コロナならぬスペイン風邪が猛威を振るい始めた年でもあり、同誌１９１９年８月号の「派出婦会の成績」という記事によると「あの世界感冒（かぜ）で、あちらからもこちらからも、派出婦に来て欲しいといふ御申込みで、どうすることも出来なかつたさうです」。

さらに、検索リストには当時刊行されていた多くの婦人雑誌が並んでいます。戦後も長く刊行されていた『主婦之友』だけでなく、『婦人界』『婦人倶楽部』『婦女界』『女人芸術』といった雑誌が競って派出婦会を取り上げて記事にしていたことがわかってきました。中でも面白かったのは、『婦人倶楽部』１９３０年１月号の「見事時代の潮に乗つて―派出婦人会の創始者大和俊子さん―」という記事です。銀行員と結婚した大和俊子は働くのが何よりも楽しみだったのに、夫の出勤後家の中でぼんやりと手持ち無沙汰にしているのがつらくて仕方がありません。しかし１００年以上昔のこの時代、人妻の身では働く場はほとんどありま

国立国会図書館デジタルコレクションの「詳細検索」画面（https://dl.ndl.go.jp/search）でキーワードに「派出婦会」と入力し、「コレクション」のチェックを「雑誌」にのみ入れた検索結果（「出版日：古い順」にソート）※ 2024 年 8 月 1 日現在

せん。そこで、

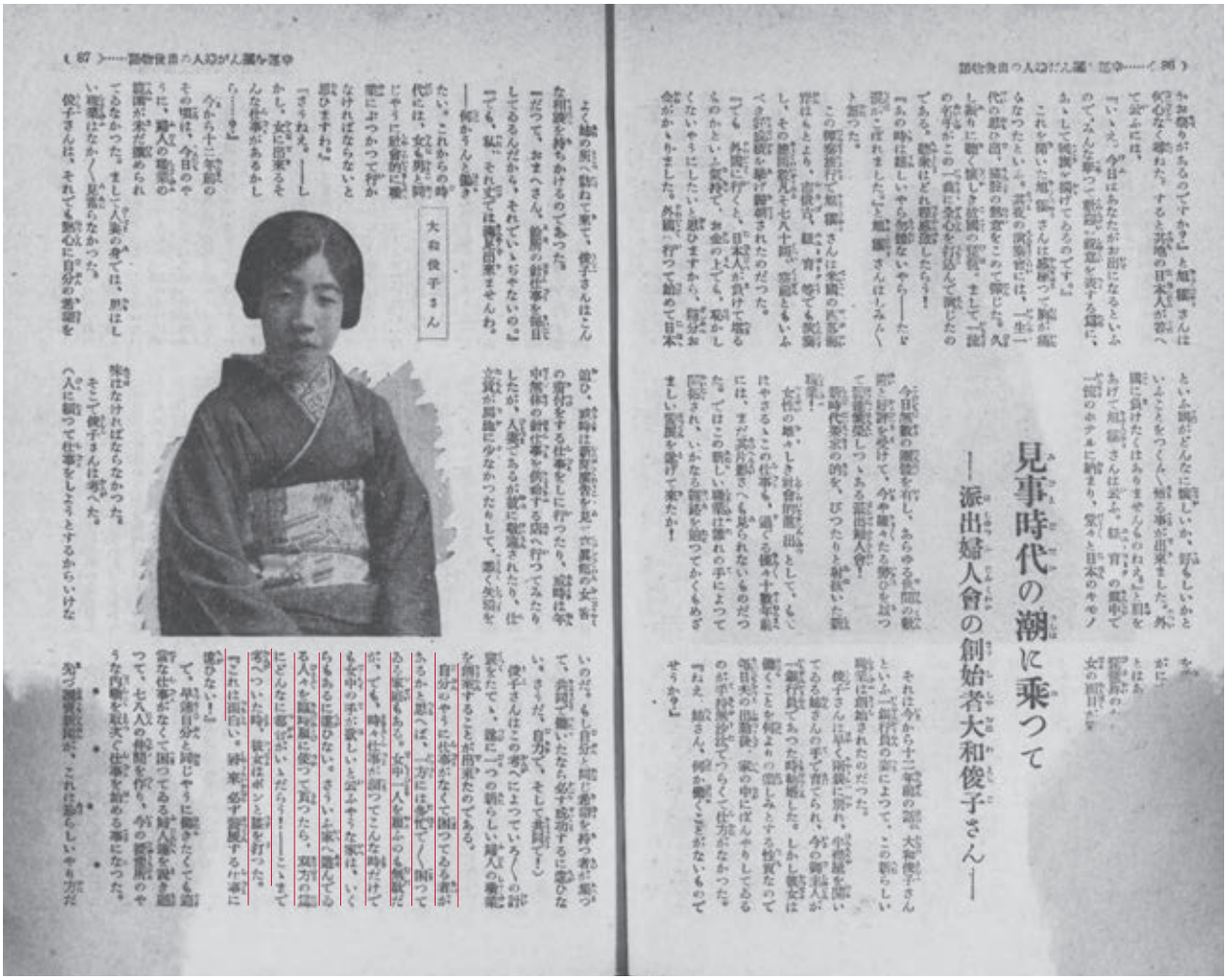
自分のやうに仕事がなくて困つてゐる者があるかと思へば、一方には多忙で〳〵困つてゐる家庭もある。女中一人を雇ふのも無駄だが、でも、時々仕事が溜つてこんな時だけでも女中の手が欲しいと云ふやうな家は、いくらもあるに違ひない。さういふ家へ遊んでゐる人々を臨時雇に使つて貰つたら、双方の為にどんなに都合がいゝだらう！

――こゝまで考へついた時、彼女はポンと膝を打つた。

『これは面白い。将来必ず発展する仕事に違ひない！』

昨今のビジネス誌に載せても全く違和感がないようなニュービジネス開拓記になっています。派出婦会が発展するにつれ、封建的な雇用関係に苦しめられてきた女中のなり手は減少していき、当時の小説には女中払底の世相が描かれています。

こうして健全に発展していった戦前の派出婦会が、１９３８年の職業紹介法改正で労務供給事業として許可制の下に置かれるようになったとき、そこで一緒くたにされ



見事時代の潮に乘つて
――派出婦人會の創始者大和俊子さん――

大和俊子さん

「見事時代の潮に乗つて―派出婦人会の創始者大和俊子さん―」『婦人倶楽部』11(1), 1930 年1月
https://dl.ndl.go.jp/pid/3562033/1/80
※国立国会図書館内限定の資料です。

たのはピンハネ親方が肉体労働者をとことん搾取する悪辣な人夫供給請負業でした。そして戦後、GHQは日本社会を民主化するために、封建的雇用制度である労働者供給事業を全面禁止せよと命じました。彼らの目に映っていたのは悲惨な人夫の姿であり、その限りでは「正義の刃」であったのですが、その刃を振り下ろした場所には、法的に人夫供給業とバンドリングされた近代的な派出婦会があることは見えていなかったのです。

労働基準法が適用されない家事使用人とは、主人世帯の一員である女中のことであって、派出婦会から派遣されてくる家政婦は家事使用人ではありませんでした。少なくとも、1947年9月に労働基準法が施行されたときにはそうでした。その証拠に、労働基準法施行規則第1条にはその適用事業として「派出婦会の派出の事業」が明記されていたのです。ところが、同年12月に職業安定法が施行され、翌1948年3月には労働者供給事業が全面禁止され、派出婦会は違法の存在になってしまいました。数年間のドタバタを経て、1951年10月に家政婦が有料職業紹介事業の対象職種に追加され、ようやく合法的な事業になったのですが、それと引き換えに、彼女らは女中と同様の家事使用人という身分を押しつけられてしまったのです。

かつて人気を博した『家政婦は見た！』というテレビドラマでは、「市原悦子演じる石崎秋子が大沢家政婦紹介所の家政婦として上流階級の華やかな暮らしぶりの家庭に派遣され」（Wikipedia「家政婦は見た！」のページ）ます。「紹介」といいながら「派遣」しているのです。それどころか、石崎秋子は大沢家政婦紹介所に猫と一緒に寝泊まりし、毎回紹介所に所属する家政婦たちがちゃぶ台を囲んで派遣先の噂話で盛り上がります。どうひっくり返っても、主人の世帯の一員（国勢調査でいう「住み込みの雇い人」）ではないはずなのに、労働基準法上は女中扱いされ、過労死しても労災認定されないという不条理のもとをたどっていくと、こういういきさつがあるわけです。

本書を執筆する上では、大和俊子や派出婦会の実像についてだけではなく、戦前の女中が置かれていた苛酷で悲惨な労働条件や、悪逆非道な人夫供給業のあの手この手の悪辣ぶりについても、デジタルコレクションで検索して出てきた膨大な資料の中からいくつものネタを使わせていただきました。おそらく、私のような意図を持って検索しない限りなかなか人の目に触れないような資料ですが、その生々しさは一級品です。是非拙著を読んでいただいた上で、そこに載せきれなかった部分もデジタルコレクションで探してみてください。インテリ青年のどん底生活を描いた吉田英雄『日稼哀話』（平凡社、1930）など、復刻出版されているのもうなずけるほどの迫力です。

私はたまたま家政婦の歴史研究からデジタルコレクションの威力を知るに至りましたが、ほかにもデジタルコレクションを使えば百万力になるような研究分野はいっぱいあるはずです。ほんの2年前の私も、デジタルコレクションを使ったことがなく、恐る恐る使い始めたような新参者に過ぎません。それでほんの1年足らずでデジタルコレクションがなければ絶対に書けなかったような本を出すに至っているのですから、敷居はとても低いのです。これからの近現代史研究、とりわけあんまり主流じゃないような領域の歴史研究をしようとする人にとって、デジタルコレクションを使わないで研究をすることはもはやあり得ない時代になりつつあると思います。

国立国会図書館デジタルコレクションの全文検索を活用しよう!

国立国会図書館デジタルコレクションでは、収録された資料の多くについて全文検索を行うことができます。全文検索では、図書や雑誌のタイトル・目次だけでなく、本文・挿絵のキャプション・表の中身なども検索することができるので、従来の検索では見つけられなかった情報を発見できる可能性があります。

この記事では、国立国会図書館の全文検索機能の使い方について簡単にご紹介します。

全文検索機能を使って検索するには？

国立国会図書館デジタルコレクションのトップページにあるキーワード検索欄に入力して検索すると、デフォルトで全文検索も行われます。

トップページのキーワード検索欄

全文検索ではかえって関係ない検索結果が出てきすぎる、という場合は、「詳細検索」のオプションで「全文検索」のチェックを外すことができます。

全文検索の対象資料

2024（令和 6）年 11 月時点で、全文検索の対象となっているのは、当館が国立国会図書館デジタルコレクション上で提供を行っているデジタル化済みの図書・雑誌等資料のうち約 297 万点です。
個々の資料の書誌情報のうち「公開開始日（W3CDTF）」が令和 2 年 11 月以前であればおおむね全文検索が可能です。
主な対象資料の内訳は下表のとおりです（2024（令和 6）年 11 月時点）。

コレクション	資料概数	うち、全文検索可能な資料概数
図書	2,088,000 点	1,475,000 点
雑誌	1,388,000 点	1,320,000 点
博士論文	180,000 点	149,000 点
官報	21,000 点	21,000 点

今後もデジタル化済みの資料に対して OCR 処理によるテキスト化を順次行う予定です。最新の状況は
https://dl.ndl.go.jp/fulltext-search
をご覧ください。

検索結果の表示（一覧画面）

たとえば「藤村の羊羹」というキーワードで検索し、結果を「ログインなしで閲覧可能」なものに絞り込むと、次のような検索結果が表示されます。

キーワード前後の文字も少し表示されるので、文脈を確認して見たいところを探すことができます。

同一資料の複数のコマに検索キーワードが登場する場合は、「全●件の該当箇所」といった形で折りたたまれて表示されます。「▼」を押すことで展開することができます。

折りたたみ部分を展開したところ

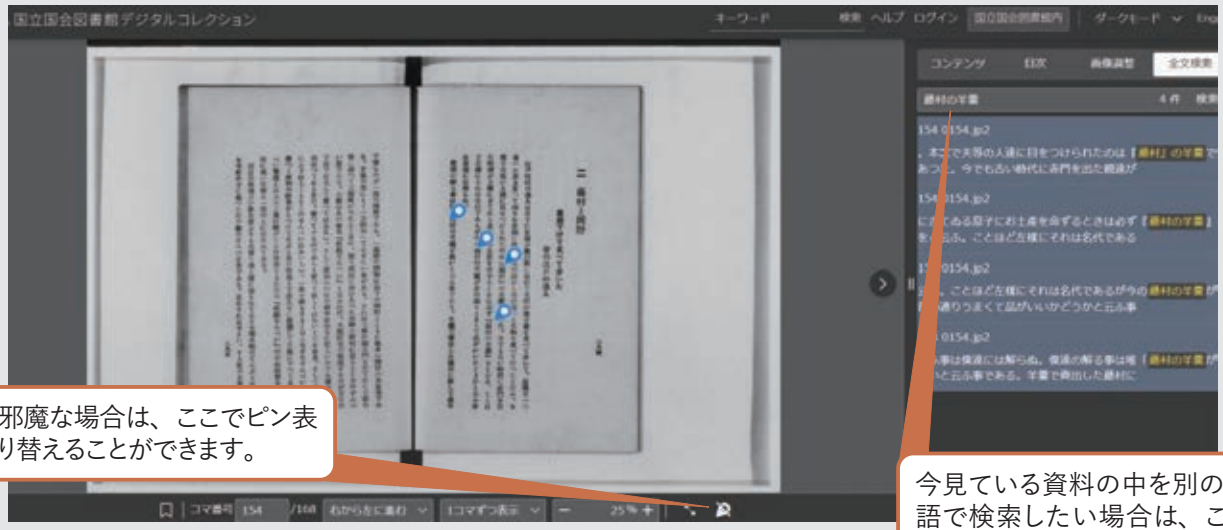
検索結果一覧画面。検索キーワードが太字で表示されている。

検索キーワードが資料の目次に登場する場合、このように表示されることがあります。「目次：」をクリックすると、目次のページではなく、目次に取られた項目が資料本文で登場するコマ（ここでは本文167ページが撮影されたコマ）に移動します。

検索キーワードが資料の本文に登場する場合、このように表示されます。「●●コマ：」をクリックすると、当該コマに移動します。

検索結果の表示（資料閲覧画面）

上の検索結果一覧画面の中で、『当世大学生気質』の「154 コマ：」の文字をクリックすると、以下のような資料閲覧画面が表示されます。



資料閲覧画面。表示されているコマでの検索キーワード登場箇所にピンが表示されている。

ピンの表示が邪魔な場合は、ここでピン表示の有無を切り替えることができます。

今見ている資料の中を別の単語で検索したい場合は、ここの文字列を変更して検索することができます。

全文検索機能を使うと、特定の用語・言い回しや人物名などを効率的に探すことができます。ぜひ様々な調査にご活用ください。

より詳しいことや検索のコツを知りたい場合は、「リサーチ・ナビ」の次のページもご参照ください。

・「全文検索を活用するには」 https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/plan/post_987
・「全文検索をさらに活用するヒント」 https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/plan/fulltext_tips

和辻哲郎自筆稿本の世界
―「和辻倫理学」の源泉をもとめて

吉村　雄太

旧制姫路中学校時代。前列向かって左から三人目が和辻哲郎。
出典：『和辻哲郎全集』第 18 巻 (自叙伝の試み), 岩波書店 , 1963
(https://dl.ndl.go.jp/pid/2974280/1/4)

国立国会図書館東京本館の古典籍資料室ではコレクション資料「和辻哲郎自筆稿本」を所蔵しています。同コレクションは哲学者・倫理学者和辻哲郎（1889～1960）の直筆の原稿等、106点からなる貴重な資料群です。

和辻哲郎は西洋哲学と東洋哲学を融合させ、「和辻倫理学」と呼ばれるような独自の倫理学体系を築き上げた学者だと言われています。本記事では和辻哲郎の生涯を紹介するとともに、同コレクションの内容とその魅力について紹介します。

1. 和辻哲郎の人と思想

和辻哲郎（わつじてつろう）という名前を聞いたことはあっても、その生涯についてご存じの方は案外少ないのではないでしょうか。「和辻哲郎自筆稿本」を紹介する前に、和辻の生涯についてみてみたいと思います。

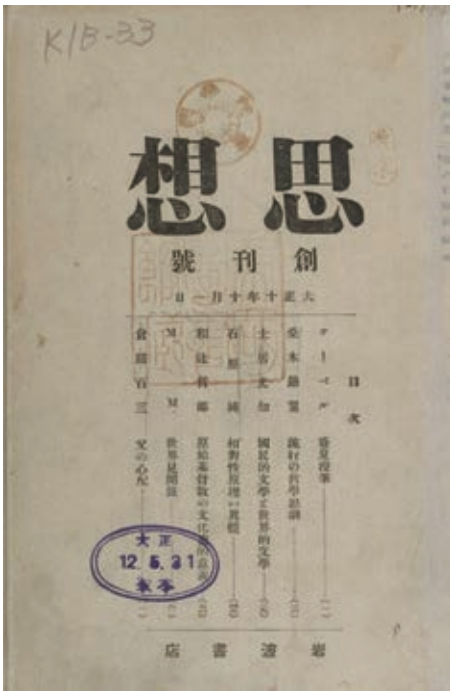
明治22（1889）年3月1日、和辻哲郎は現在の兵庫県姫路市仁豊野（にぶの）の医師の家系に生まれました。和辻は生涯にわたって故郷を愛していたようで、自身のエッセイの中で故郷のことを「わたくしの記憶にあってわたくしの愛惜を呼んでいる農村[1]」と表現しています。17歳の時に旧制姫路中学校を卒業して東京の旧制第一高等学校に進学。その後、東京帝国大学の哲学科で学びました。

一般に哲学者・倫理学者として知られている和辻ですが、学生時代は哲学・倫理学だけなく、小説や、戯曲、批評などの執筆に力を入れていました。学生時代の和辻は、夏目漱石を中心とした「木曜会」というサロンに出入りしています。当時の「木曜会」には安倍能成（よしなり）や阿部次郎、内田百閒、といった人たちがいました。

「漱石を核とするこの若い連中の集まりは、フランスでいうサロンのようなものになっていた。木曜日の晩には、そこへ行きさえすれば、楽しい知的饗宴にあずかることができたのである[2]」と和辻は若きの日のことを語っています。また谷崎潤一郎とは帝国大学で「新思潮」（第二次）という雑誌を発行しており、終生その交友関係を続けました。

そんな和辻を世間的に一躍有名にしたのは、大正8（1919）年に刊行された『古寺巡礼』です。これは和辻が20代後半の頃に、友人と奈良へ旅行した際の紀行文です。東大寺や唐招提寺といっ

東京帝国大学学生時代
出典：『現代日本思想大系 第 28』筑摩書房 , 1963
(https://dl.ndl.go.jp/pid/2940720/1/12)



『思想』(1), 岩波書店 , 1921.10　<Z23-90>
岩波書店から刊行されている人文社会学雑誌『思想』の創刊号。和辻哲郎が雑誌の創刊、刊行に深く関わりました。休刊はあったものの『思想』は和辻の時代から今に至るまで刊行を続けています。

た奈良の仏像を流麗な筆致で論じ、旧制高等学校の学生達を中心に広く読まれました。ただ仏像について論じるだけでなく、和辻が自身の悩める姿を率直に記しているという点が当時の青年達の共感を呼んだのかもしれません。『古寺巡礼』の中で和辻は次のように述べています。

> 昨夜父は言った。お前の今やっていることは道のためにどれだけ役に立つのか、頽廃した世道人心を救うのにどれだけ貢献することができるのか。この問いには返事ができなかった。(3)

農村から東京に出て、哲学や文学に精を出してきたが、「絶えず生活をフラフラさせて、わき道にばかりそれている」(4)のではないか、と和辻は同著の中で自身を顧みています。医師の家系に生まれた和辻には、人の役に立たなければという思いがあったようです。現実の出来事と、一見すると現実からかけ離れているようにみえる研究との折り合いをどのようにつければよいのか煩悶する若き和辻の姿が『古寺巡礼』には記されています。そうした煩悶が後に和辻を倫理学の道に導いたのかもしれません。

大正9年に東洋大学講師に就任。大正10年には岩波書店から雑誌『思想』を創刊します。自身は編集者として積極的に『思想』の刊行に関わりました。

転機が訪れたのは大正14年、36歳の時でした。『善の研究』で知られる哲学者西田幾多郎と宗教学者波多野精一に見いだされ、和辻は京都帝国大学の倫理学科の助教授に任命されるのです。和辻が京都で教鞭を取っていた頃には、和辻の他にも田辺元、九鬼周造といった優秀な哲学者達が集まっていました。当時の学生で、後に国立国会図書館の初代副館長も務めた美学者の中井正一はその頃の雰囲気をこのように記しています。

> この一〇年間の京都の学会はまことに百花繚乱の時でもあった。西田、深田、朝永、波多野、藤井、小西、松本の教授陣を配するに、少壮気鋭の助教授講師陣、天野貞裕、田辺元、和辻哲郎、山内得立、植田寿蔵、小島裕馬、九鬼周造の諸先生が星のごとく輝いていたのである。(5)

当時の京都では、西田幾多郎とその元

京都学派と国立国会図書館―初代副館長中井正一について

実は京都学派と縁のある国立国会図書館。国立国会図書館の初代副館長の中井正一（1900～1952）は、京都学派の流れを汲む学者でした。中井は京都帝国大学で深田康算（やすかず）や九鬼周造といった京都学派の学者に師事し、自身も京都帝国大学の講師として俗に「中井美学」と呼ばれる独自の美学体系を作り上げました。代表著作に『美学入門』や哲学的に組織というものを考察した「委員会の論理」という論文があります。また自身の故郷である尾道の尾道市立図書館館長も務めました。

戦後、参議院図書館運営委員長であった歴史家の羽仁（はに）五郎の推薦によって、国立国会図書館初代副館長に就任します。中井にとって副館長としての仕事は、戦後日本に民主主義を根付かせるという哲学的実践でもありました。ただ立ち上げ当初はかなり大変だったらしく、「係のものは二週間、朝三時ごろまで寝ない日がつづいた。私も夜半まで皆の帰るのをただ一人待つ日が多かった*」と述べています。それでも中井は国立国会図書館の意義を信じて副館長としての職務を果たしました。「国立国会図書館のこのごろ」というエッセイの中で中井は次のように述べています。

「あらゆる無理解をもつらぬいて、目に見えない未来に向かって、国の政治もよくなり、全日本の図書館（図書館法によってこれから生まれる一万の村々の図書館）に、わが館のカードとともに、良書が虹のように降りそそぐときがいつの日にか来ると、私たちは信じ、それに命を賭けることに日々を費やしているのである**」。

中井の図書館に賭ける強い思いが感じられる文章です。

中井正一
出典：中井正一著ほか『美と集団の論理』中央公論社，1962
（https://dl.ndl.go.jp/pid/2498093/1/5）

＊ 久野収編『中井正一全集』第4巻, 美術出版社, 1981, pp.223-224　https://dl.ndl.go.jp/pid/12417736/1/117
＊＊ 同書 p.224　https://dl.ndl.go.jp/pid/12417736/1/118

に集まってきた哲学者たちが、教員と学生と分け隔てなく、日夜喧々諤々（けんけんがくがく）の議論を繰り広げていました。時には西田をはじめとした教員の家に学生が押しかけてきて議論するということもあったそうです。いわゆる「京都学派」の思想が花開いた時代です。和辻も「京都学派」の中心的なメンバーの一人として、約十年間京都で教鞭を取りました。

そして昭和9（1934）年、和辻の京都時代の集大成として『人間の学としての倫理学』が刊行されます。「西田幾多郎先生にささぐ」という献辞から始まるその文章は、西田幾多郎の哲学から大きく影響を受けたもので、「和辻倫理学」の礎となるような著作でした。

同年、和辻は東京帝国大学の教授に就任します。翌年、すぐさま『風土　人間学的考察』という著作を刊行します。同著作で和辻は「風土」という言葉をキーワードに、自然環境の中でいかにして人間の思考や行動様式が形作られてきたのかということを論じました。『風土』も京都帝国大学時代の講義を下地にした著作でした。

そして『人間の学としての倫理学』と『風土』で論じられた内容が、『倫理学』という著作に結実することになります。『倫理学』は上巻・中巻・下巻の三部作からなる大著で、第二次世界大戦をはさんで、昭和12年から昭和24年にかけて刊行されました。同書で和辻は「倫理を単に個人意識の問題とする近世の誤謬から脱却すること」[6]を掲げ、西洋の思想を批判し、東洋思想の「空」の思想を根底に据えた「間柄」の倫理学を論じました。『倫理学』によって和辻は西洋の個人主義的な倫理学とは異なる、「和辻倫理学」ともいうべき独自の思想体系を確立したということができます。『倫理学』の上巻を読んだ西田は「私は尊兄の倫理学の考へ方を大変に面白いと思ふものでございます」[7]という手紙を送っています。和辻が師である西田に思想家として認められた瞬間だったかもしれません。しかしながら、西田は戦中病に倒れ、昭和20年に死去。自身の『倫理学』の完成を師である西田に見てもらうことは叶いませんでした。

『倫理学』の刊行を終えた昭和24年に和辻は東京帝国大学を退官。昭和27年には古代から近代までの日本の倫理思想を

和辻哲郎の思想

ここでは和辻の代表的な著作である『人間の学としての倫理学』、『風土　人間学的考察』から、ほんの少しだけ和辻の思想を紹介します。

『人間の学としての倫理学』―間柄思想の倫理学

『人間の学としての倫理学』はその名の通り、「人間」という言葉の分析と、そこから始まる新しい倫理学について探求した著作です。本書で和辻は「人間」という言葉を「ジンカン」と読み、「人間」は独立に生きる個体的なものではなく、人と人の間に生きる存在、つまり「世の中」で生きる存在であると考えました。たとえば日本では家に入る時に靴を脱ぎますが、西洋では靴を脱がないことが一般的です。個人の行動は「世の中」の常識や、人間関係の中で規定されています。一方で、「世の中」の側も、個人と独立して存在するのではなく、個人の行動が集まって生み出されたものです。

「人間とは「世の中」自身であるとともにまた世の中における「人」である。従って「人間」は単なる人でもなければまた単なる社会でもない。人間においてはその両者は弁証法的に統一せられている*」とし、「個人」と「世の中」とは別々に切り離すことができないものだと考えました。そこから和辻は、「人間」とは「世間」、つまり人々の「間柄」を生きる「間柄的存在」だとして、「間柄思想」を唱えました。

こうした和辻の「間柄思想」は、西洋哲学において当時主流だった個人主義的な人間観を批判する意図がありました。個人主義的人間観においては、人間を社会から切り離された「孤立的自我」として考えるという思考が一般的でした。けれどもそのように社会から切り離された人は実際には存在しません。人間を「孤立的自我」として考えず、「間柄的存在」として考えるところから倫理学を始めようとしたのが、「和辻倫理学」の独自性でした。

『風土　人間学的考察』―人間と自然の歴史の哲学

和辻は「風土」という言葉を独特の意味合いで使います。和辻にとって「風土」とは単なる「自然」ではなく、自然環境と人間の営みの歴史が混ざり合ったものです。

たとえば、私たちが「寒い」と感じる時、単に「個」として温度の程度を感じているわけではないと和辻は考えます。「寒い」と感じる時「冬がきた」、「蜜柑の季節だ」といった意味とともに感じます。また同じ「5℃」という気温でも、寒国の人にとっては暖かく感じられるかもしれません。「寒さ」はある共同体、和辻の言葉でいえば「間柄」の中で見いだされるものだと、和辻は考えます。

そうは言っても、「私は寒がりだ」といった言葉があるように、「寒さ」には個人差があるのではないかと疑問を持つ方もいらっしゃることでしょう。しかし「我々の間に寒さの感じ方がおのおの異なっているということも、寒さを共同に感ずるという地盤において可能となる**」と和辻は書いています。ある共同体における「寒さ」という共通の基準があってはじめて、「私は寒がりだ」という個人的な「寒さ」を感じることができるようになると和辻は考えたのです。そこから和辻は「すなわち我々は「風土」において我々自身を、間柄としての我々自身を、見出すのである***」と結論づけています。つまり「寒い」といった感覚には、その言葉が使われる共同体の歴史が埋め込まれていると和辻は考えたのです。そして「風土」を研究することは、ある土地における人間と自然の関わりの歴史を研究することだと考えたのです。

そこから和辻は「風土」という言葉をキーワードに、自然環境の中でいかにして人間の思考や行動様式が形作られてきたのかということを論じました。特に和辻は「風土」の型を大きく三つに分け、日本をはじめとしたアジアの国々は「モンスーン型」、中東の国々は「砂漠型」、ヨーロッパの国々は「牧場型」として、それぞれの「風土」における人間の思考や行動様式について論じました。

風土の三つの類型については、現在の科学的見地などからは批判的に語られることがあります。しかし「風土」という和辻の考え自体は環境哲学などの観点から近年再評価が高まりつつあり 、「風土」の思想は今なお色あせないものとなっています。

＊『和辻哲郎全集』第９巻（人間の学としての倫理学，カント実践理性批判，人格と人類性），岩波書店，1962, p.20　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974271/1/17
＊＊『和辻哲郎全集』第８巻（風土，イタリア古寺巡礼），岩波書店，1962, p.10　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974270/1/11
＊＊＊同書，p.11　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974270/1/11

辿る『日本倫理思想史』を刊行。また倫理思想だけでなく、日本の芸術について論じた『歌舞伎と操り浄瑠璃』なども著しました。

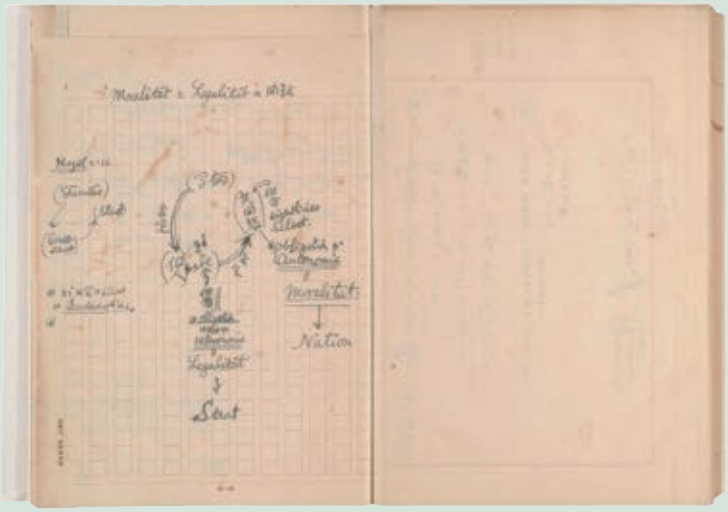
晩年の和辻は周囲に、学問が「面白くて、面白くて」[8]と漏らしていたそうです。和辻の筆の歩みは終生衰えることなく、昭和35年に71歳で息を引き取るまで精力的に執筆活動を続けました。

和辻哲郎の死後、妻である和辻照氏が編纂した『和辻哲郎の思ひ出』には、様々な人物が追悼文を寄せています。哲学仲間であり、和辻の没後に『和辻哲郎全集』を編纂した安倍能成。若き日の文学仲間であった谷崎潤一郎。京都学派の一員であり、和辻に師事した高坂正顕（こうさかまさあき）。

多くの交友関係の中で思考し、時には議論を交わし、自身の著作を発表しながら、後進の育成にも力を入れていた和辻の生涯が、その追悼集からはうかがえます。「人間」は「人と人の間に生きる存在」であるとして「間柄」の倫理を唱えた和辻ですが、実生活でも他者を大切にし、他者から愛された倫理学者だったのだと言えるかもしれません。

ここでは「和辻哲郎自筆稿本」の中から興味深い資料を
いくつかピックアップしてご紹介したいと思います。

風土
和辻の代表著作である『風土』の初稿原稿です。本資料の翻刻は『和辻哲郎全集 別巻 1』にも収録されています。
(https://dl.ndl.go.jp/pid/2532455)



倫理学 [3]
和辻哲郎の主著である『倫理学』の初稿原稿です。和辻が自身の頭の整理のために書いたと思われる図が記載されています。書籍として刊行された『倫理学』には掲載されていない図で、和辻の執筆過程が伺える貴重な資料です。
(https://dl.ndl.go.jp/pid/2546214)

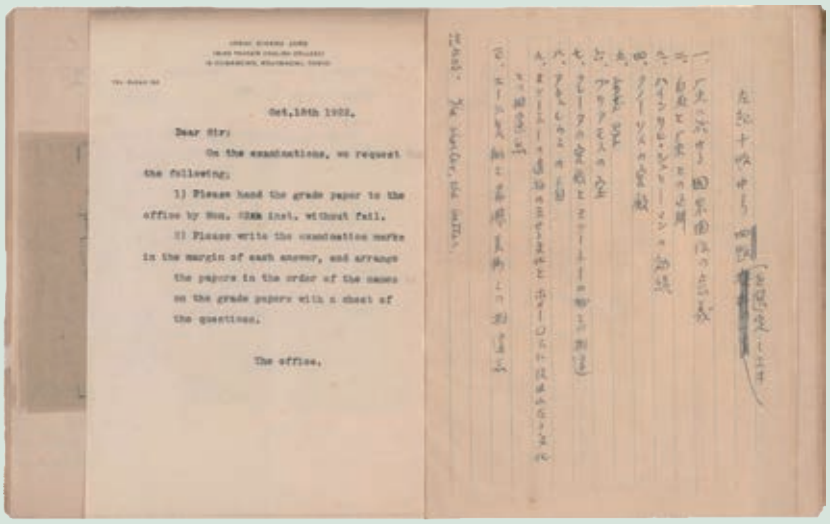
2. 和辻哲郎自筆稿本の紹介とその特徴

「和辻哲郎自筆稿本」は和辻哲郎の自筆稿本や、新聞、雑誌の切り抜きなどからなる106点のコレクション資料です。全点デジタル化されており、国立国会図書館デジタルコレクションでインターネット公開しています。

106点のコレクション資料の大部分を占める103点は、夫人の和辻照氏より寄贈されました。残る3点のうち「風土」[9]と「カント実践理性批判」[10]については岩波書店で和辻哲郎の原稿の編集を行っていた布川角左衛門から寄贈されています。またもう1点の「アメリカの國民性」[11]については、当館が古書店から購入した資料です。

世上、高名な学者や文学者の自筆稿本の類は数多くあるが、一個人の著作がこれほど多量にわたり原稿の形で残されていることは珍しい、当館の購入図書評価員であった文淵閣の吉田久兵衛氏は、本コレクションを見てそのような感想をもらされたそうです。[12]

なぜ当館のコレクションがこれほど



Oct.18th 1922.

Dear Sir:

On the examinations, we request the following:

1) Please hand the grade paper to the office by Mon. 23th inst. without fail.

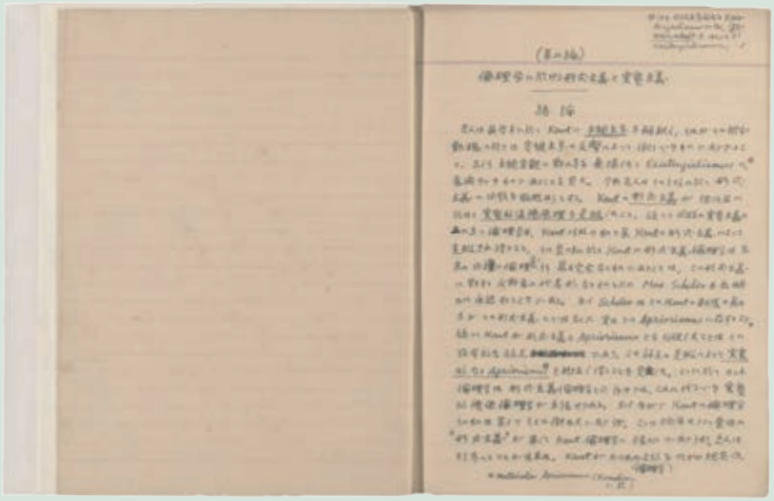
2) Please write the examination marks in the margin of each answer, and arrange the papers in the order of the names on the grade papers with a sheet of the questions.

The office.

西洋文化史 希臘 1,2 [2]

和辻哲郎が女子英学塾（現・津田塾大学）で行っていた西洋文化史の講義ノートです。資料に記載された日付から、大正 11（1922）年頃に作成されたものではないかと思われます。和辻が当時の学生に出題していた試験問題が記されています。和辻が学生達にどのような試験を出題していたかが分かる興味深い資料です。この講義録を読んで試験問題を解けば、あなたも和辻の弟子になれるかもしれません（？）

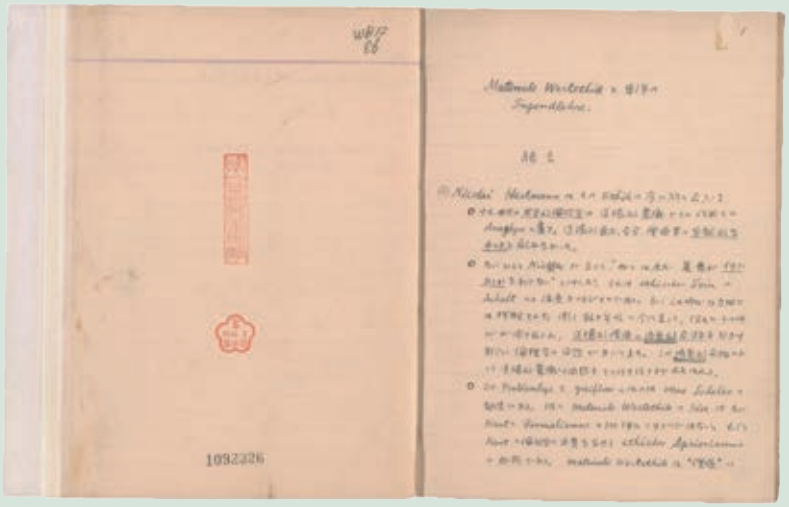
(https://dl.ndl.go.jp/pid/2546224)



シェラー倫理学叙述と批判

ドイツの哲学者マックス・シェラー（Max Scheler）の倫理学について書かれた約 200 ページにわたる大部のノートです。大学の講義のために記したノートであると思われます。マックス・シェラーについて体系的に論述されており、和辻のシェラー解釈を伺うことができます。本資料は活字化されておらず、全集にも未収録の資料です。そのため本コレクション資料でしか閲覧することのできない貴重な資料となっています。

(https://dl.ndl.go.jp/pid/2532441)



Materiale Wertethik と東洋の徳論

題名からマックス・シェラーが唱えた「実質的価値倫理学（Materiale Wertethik）」と東洋の儒教における「徳論」の比較を目的とした講義ノートだと思われます。ただしその内容の大半はドイツの哲学者イマニュエル・カントの哲学の批判的考察で占められています。約 240 ページにわたる大部のノートで、内容的に上に挙げた『シェラー倫理学叙述と批判』と関連があり、同時期に作成されたものではないかと推測されます。本資料も活字化されておらず、全集未収録の資料となっています。そのため本コレクション資料でしか閲覧することのできない貴重な資料です。

(https://dl.ndl.go.jp/pid/2532449)

リサーチ･ナビ「和辻哲郎自筆稿本」では同コレクションの内容や利用方法を紹介しています。リサーチ・ナビ掲載の資料目録では、それぞれ国立国会図書館デジタルコレクションへのリンクを貼っておりますので、目録内の資料名をクリック頂ければそのまま資料をご覧いただくことが可能です。

(https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/oldmaterials/watsuji_tetsuro)

和辻哲郎と布川角左衛門

布川角左衛門（1901-1996）は岩波書店の編集者として活躍し、栗田出版販売の会長や筑摩書房の代表取締役を務めた出版人です。日本出版学会の創設や『日本出版百年史年表』の執筆など、日本の出版界に大きな影響を与えました。

そんな布川ですが、実は岩波書店時代は和辻哲郎の原稿の担当者でした。『面とペルソナ』という著作のあとがきに、布川の名前が出てきます。

「こゝに一冊の書となつて現れるに至つたのは、岩波書店の布川君の半年に亙る熱心な勧誘に基づくのである*」

岩波時代の布川は、和辻のみならず、西田幾多郎、田辺元、三木清といったいわゆる京都学派の哲学者たちの原稿の編集を担当していました。和辻は布川のことを気にかけていたようで、布川が田辺元に原稿を書いてもらえるように紹介状を書いてあげたりもしていたようです。**

「和辻哲郎自筆稿本」のうち「風土」と「カント実践理性批判」については布川角左衛門から寄贈された資料となっています。詳しい経緯は不明ですが、おそらく布川個人あるいは岩波書店が保有していた原稿が当館に寄贈されたのではないかと思われます。

当館では「布川文庫」として布川角左衛門の旧蔵書コレクションも所蔵しています。その多くは布川が専門とした出版関係の資料ですが、布川自身が編集に携わった和辻哲郎や京都学派の哲学者達の初版本なども含まれています。「和辻哲郎自筆稿本」とともに、「布川文庫」もぜひご利用ください。資料の詳細やご利用方法はリサーチ・ナビ「布川文庫」をご一読ください。

リサーチ・ナビ「布川文庫」
(https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/humanities/post_100040)

＊ 和辻哲郎『面とペルソナ』岩波書店, 1937,「跋」p.1　https://dl.ndl.go.jp/pid/1217957/1/155
＊＊ 布川角左衛門『出版の諸相』(エディター叢書 ; 9) 日本エディタースクール出版部, 1975, p.207　https://dl.ndl.go.jp/pid/12276866/1/110

まとまった数になっているのかというと、それはひとえに寄贈された夫人の照氏と子息の夏彦氏のご尽力によるものです。お二人は和辻家に保管されていた自筆稿本をまとめるだけでなく、古書展などに売り出されていた原稿を買い集める等の方法で積極的に収集し、製本等も独自で行っておられました。

岩波書店の藤森善貢（よしつぐ）氏は「著書と原稿と先生」という文章の中で、『和辻哲郎全集』に触れる形で、和辻の資料の保存状況について次のように述べています。

> この全集［注：『和辻哲郎全集』］ほど原稿や資料が整備されているものも珍しいといってよい。これは照子夫人の功績によるものである。先生の原稿はほとんど製本して保存されているばかりでなく、出版された初版本や改訂本をはじめ、その書評の切り抜き、写真類にいたるまでが整理されており、また各方面から先生に寄せられた書簡なども保存されていた。とくに貴重と思われるのは、先生がメモをされた手帳や論文の骨組をなすノートまでが保存されていたことである。（中略）学界に大きな業績を遺されたのは、先生の天才的な才能によるものであるが、それを支えてきた夫人の温かい心遣いのあったことも忘れてはならないだろう。[13]

藤森氏の言葉にある「先生がメモされた手帳や論文の骨組をなすノート」が「和辻哲郎自筆稿本」として当館に所蔵されている資料です。『残照　和辻照遺稿集』には、「かねて精魂をこめて整理してゐた夫・哲郎の手書き原稿を全部、永井道雄夫妻のあつせんにより、国会図書館に寄贈した[14]」と記されており、照夫人が長年和辻の原稿を丁寧に整理されていた様子がうかがえます。

当館所蔵の「和辻哲郎自筆稿本」の一部は翻刻されて『和辻哲郎全集』に収録されています。しかし全集には多くが抄録という形で掲載されており、その全てを読むことはできません。また全集には収録されていない資料も「和辻哲郎自筆稿本」には含まれています。和辻哲郎が遺した手帳や、ノート、原稿をオリジナルに近い形で見たいという方は、ぜひ国立国会図書館デジタルコレクションからご覧ください。

昭和 28 年 4 月、自宅書庫で撮られた肖像写真。後ろには和辻が所蔵していた岸田劉生の麗子像の絵画も掛けられています。
出典：『和辻哲郎全集』第 1 巻 , 岩波書店 , 1961 (https://dl.ndl.go.jp/pid/2974436/1/4)

文化勲章受章の夜の和辻哲郎と照夫人。後ろの掛軸は師であった夏目漱石の書。昭和 30 年 11 月 3 日、息子の和辻夏彦氏による撮影。
出典：和辻照著ほか『残照　和辻照遺稿集』和辻夏彦 , 1978 <GK154-43>

3. 和辻哲郎自筆稿本の研究とその意義

近年、和辻哲郎の初版本や初稿本の復刻とそれを用いた研究が盛んになりつつあり[15]、当館の「和辻哲郎自筆稿本」を用いた研究も行われています[16]。和辻哲郎の初版本や自筆稿本の研究が盛んである背景には、和辻が改稿の度に内容を大きく変更する思想家だった点が挙げられます。そのため和辻の原稿を見比べることで、和辻の思索の変遷をたどることができるのです。

当館の「和辻哲郎自筆稿本」の原稿やメモのはしがきには和辻の思索の跡がたくさん残されています。和辻哲郎が何から影響を受け、そして何を考えたのか。そのヒントが「和辻哲郎自筆稿本」には眠っているかもしれません。当館の「和辻哲郎自筆稿本」が、和辻哲郎研究や和辻思想の理解の一助になれば幸いです。

1『和辻哲郎全集』第 18 巻 (自叙伝の試み), 岩波書店 , 1963, p.7 https://dl.ndl.go.jp/pid/2974280/1/10
2「埋もれた日本」『和辻哲郎全集』第 3 巻 (日本古代文化 , 埋もれた日本), 岩波書店 , 1963, p.422　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974257/1/222
3『和辻哲郎全集』第 2 巻 , 岩波書店 , 1961, p.18　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974437/1/15
4 同書 , p.18
5「回顧十年」『中井正一全集』第 1 巻 (哲学と美学の接点), 美術出版社 , 1981, p.350　https://dl.ndl.go.jp/pid/12417733/1/179 引用部分で名前の挙がる「西田、深田、朝永、波多野、藤井、小西、松本」は順に西田幾多郎、深田康算、朝永三十郎、波多野精一、藤井健治郎、小西重直、松本文三郎。
6『和辻哲郎全集』第 10 巻 (倫理学 上), 岩波書店 , 1962, p.11 https://dl.ndl.go.jp/pid/2974272/1/12
7『西田幾多郎全集』別巻第 5(書簡集第 1), 岩波書店 , 1953, p.598 <121.9-N744n>
8 尾高京子「父のうしろ姿」和辻照『和辻哲郎の思ひ出』和辻照 , 1962, p.290　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974379/1/157
9 和辻哲郎自筆稿本「風土」 https://dl.ndl.go.jp/pid/2532455
10 和辻哲郎自筆稿本「カント実践理性批判」 https://dl.ndl.go.jp/pid/2532426
11 和辻哲郎自筆稿本「アメリカの國民性」 https://dl.ndl.go.jp/pid/2532456
12「和辻哲郎自筆稿本の受贈について」『国立国会図書館月報』(176), 1975.11, p.13　<Z21-146>
13 前掲注 8, pp.94-95　https://dl.ndl.go.jp/pid/2974379/1/59
14 和辻照著ほか『残照　和辻照遺稿集』和辻夏彦 , 1978, p.191 <GK154-43>
15 初版本や初稿本の復刻としては『初稿倫理学』(筑摩書房 , 2017　<H51-L87>) や『初版古寺巡礼』(筑摩書房 , 2012 <K81-J49>) といったものがあります。また初版本や初稿本の研究としては、『倫理学』の初稿本を研究した子安宣邦『和辻倫理学を読む　もう一つの「近代の超克」』(青土社 , 2010 <HA144-J5>) などがあります。
16 服部圭祐「和辻哲郎の未発表草稿『倫理学』について ―「和辻倫理学」の成立過程 ―」『倫理学年報』(69), 日本倫理学会 , 2020　, pp.263-276<Z9-194>

< > 内は当館請求記号

オリジナルのカードをどうぞ

館内スコープ

奥から初校、再校、三校。原資料と見比べ、色合いを近づけていきます。着物の色などピンポイントで修正をお願いする場合もあります。

総務係は、館内の会議のための準備や、職員向けの館内放送、そして『月報』をはじめとする館の刊行物を国会事務局へお届けしたり外部機関等へ発送したりと、様々な業務を担っています。

突然ですが、皆さんは昨年のクリスマスをどのように過ごされましたか。プレゼントと美味しい料理を用意して、お祝いされた方も多いのではないでしょうか。海外ではクリスマス当日を迎える前にグリーティングカードを送り合う習慣があり、当館は国立の図書館として、海外の図書館関係者の方に向けてグリーティングカードを送っています。総務係はそのグリーティングカードを他部署と連携して作成する業務も担当します。今回は、昨年のカード作成の様子をお伝えします。

まず、当館が所蔵している古典籍資料等の中から絵柄を選ぶところから始まります。季節にふさわしいものや、海外の方に喜んでいただけるよう、日本の伝統的な文化が表されているものが望ましいですが、宗教上の問題などにも気を配る必要があります。２０２４年は、めでたい筋立ての御伽草子『文正草子』を描いた奈良絵本の一場面が選ばれました。

絵柄が決まったら、解説文の作成は古典籍資料の担当部署へ、英訳はまた他の部署に依頼します。限られた字数の中に、物語のあらすじや絵の意味するところ、時代背景などを詰め込んだ解説文が出来上がりました。そして当係は印刷業者とのやり取りを行います。実物を見たことがない人にも原資料の正確な色を伝えるため、複数人で印刷版と原資料とを見比べるのも重要な作業の一つです。

校正作業を繰り返してやっとグリーティングカードが出来上がります。多くの人の協力を得て完成したカードを、昨年も届けることができました。届けられた一枚に暫し目を留め、絵柄が示す物語に思いを馳せるような時間が生まれていたら素敵なことだと思います。（総務部総務課 総務係　１ファージング）

本屋にない本

おいしい浮世絵展
北斎　広重　国芳たちが
描いた江戸の味わい

博報堂DYメディアパートナーズ 刊
2020　318 p ; 21 cm
<請求記号 KC16-M737>

鰻のかば焼きをまるごと口に運ぶ表紙の女性が羨ましく、印象的だ。本書は２０２０年に森アーツギャラリーで開催された展覧会「おいしい浮世絵展～北斎 広重 国芳たちが描いた江戸の味わい～」の図録である。人々が食を楽しむ姿を描いた浮世絵の数々に加え、描かれた料理のレシピと再現写真も掲載されている。

第一章「季節の楽しみと食」では、春夏秋冬、季節ならではの食を楽しむ様子が紹介されている。春は花見の宴で、すしを食べ、豆腐田楽をあぶり、お酒を片手に花見弁当を味わう。夏は端午の節句に柏餅、暑いときにはスイカで一息。秋は月見で一杯、冬は焼き芋の甘さを楽しみ、正月には餅つきをする。今も昔も季節ごとの食を楽しむことは変わらない。

第二章「にぎわう江戸の食卓」では、すしや鰻、天ぷら、蕎麦、豆腐など、江戸の暮らしに欠かせない食を楽しむ人々の姿が紹介されている。待ちきれずに手をのばしてすしをねだる子どもの絵から、当時の人々にとってすしが魅力的な食だったことが伝わってくる。鰻を軒先で捌き、火鉢でかば焼きにしている鰻屋の浮世絵からは、賑わう店の活気と人々の楽しむ声がきこえてくるようだ。また、天ぷらをひとかじりして顔をほころばせる女性。タイトルどおり「むまさう（うまそう）」で、見ていると天ぷらが食べたくなる。雪景色の中、屋台の蕎麦屋に集まる女性たちの姿。寒い中で食べるあつあつのかけ蕎麦は、さぞおいしかったことだろう。

第三章「江戸の名店」では、名店や名物料理が描かれた浮世絵が登場する。幕の内弁当で有名だった「万久（まんきゅう）」という店を紹介する浮世絵には、語尾を掛けて「髭の意休（いきゅう）」という歌舞伎の役柄が描かれている。こうした言葉遊びや謎解きを楽しみつつ、人々が名店に思いを巡らせたことが想像される。

第四章「旅と名物」では東海道五十三次の浮世絵が紹介され、道中で各地のグルメを楽しむ人々の様子を見ることができる。現代よりも過酷な旅路ながら、名勝を眺めたり、その地の名物を味わったりすることを励みとして、足をすすめたに違いない。

随所に紹介された再現レシピも本書の魅力の一つだろう。深川めし、蛸の江戸煮、ピンクや黄色に染められた白玉など、浮世絵に登場するような姿で再現された料理は魅力的で、江戸の人々が心をおどらせる様子の説得力が増す。

また、浮世絵の一枚一枚をじっくりと見てみると、「十三里」と書いて「九里（くり）（栗）＋四里（より）」うまい「焼き芋」を表した店の看板の洒落や、屋台街の中を歩く蛸の着ぐるみ姿の人などの発見もある。人々の暮らしぶりや食文化がいきいきと伝わってくるのは、庶民に親しまれ、身近な生活を描いた浮世絵だからこそかもしれない。

おいしいものを食べる幸せであふれた本書。江戸の食に思いを馳せ、お腹を空かせて読みたい一冊である。

（和多　もなみ）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

新刊案内

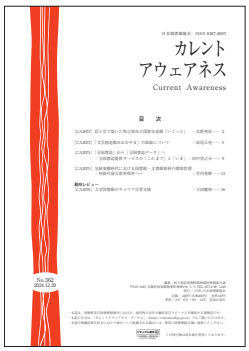
レファレンス　887号

スウェーデンの予算過程と近年の国家予算の動向
学校における生徒のウェルビーイングの促進―欧州連合の教育政策に見られる動向を中心に―
ドイツにおける市民会議の経緯及び現状―市民による政治参加の一形態―
マスメディアの集中排除規制の現状―メディア環境の変化を踏まえて―

A4　109頁　月刊　1,100円（税込）
発売　日本図書館協会

カレントアウェアネス　362号

民と官で築いた牧之原市立図書交流館「いこっと」
「文学創造都市おかやま」の取組について
「全国書誌」から「全国書誌データ」へ：全国書誌提供サービスの「これまで」と「いま」
気候変動時代における図書館・文書館資料の環境管理：持続可能な資料保存へ
＜動向レビュー＞
大学図書館のキャリア学習支援



A4　20頁　季刊　440円（税込）
発売　日本図書館協会

入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812

訂正

本誌で次の誤りがありました。

763（2024年11月）号「憲政資料室の新規公開資料から」
17ページ　石橋湛山関係文書（その一）（二〇二三年追加分）に関する説明文
（誤）この資料群の存在は、鎌倉の邸宅で東京大空襲を免れたものとしてつとに知られており、石橋湛一・伊藤隆編『石橋湛山日記』（みすず書房、二〇〇一年）に未収録の資料を含んでいます。
（正）この資料群は、鎌倉の邸宅で東京大空襲を免れたことがつとに知られていた資料や、石橋湛一・伊藤隆編『石橋湛山日記』（みすず書房、二〇〇一年）に未収録の資料を含んでいます。

763（2024年11月）号「国際子ども図書館展示会『国際アンデルセン賞受賞作家・画家展』」
33ページ　安野光雅氏に関する説明文
（誤）2017年に京都市に「森の中の家　安野光雅館」が開館しました。
（正）2017年に京都府京丹後市に「森の中の家　安野光雅館」が開館しました。

お詫びして訂正いたします。

数字で見る国立国会図書館

『国立国会図書館年報 令和５年度』から

『国立国会図書館年報　令和５年度』をもとに、国立国会図書館の業務、サービス、組織に関するおもな数字を抜粋しました。
※数字は令和６年３月31日現在（令和５年度の実績）

国会へのサービス
依頼調査回答
３万6233件

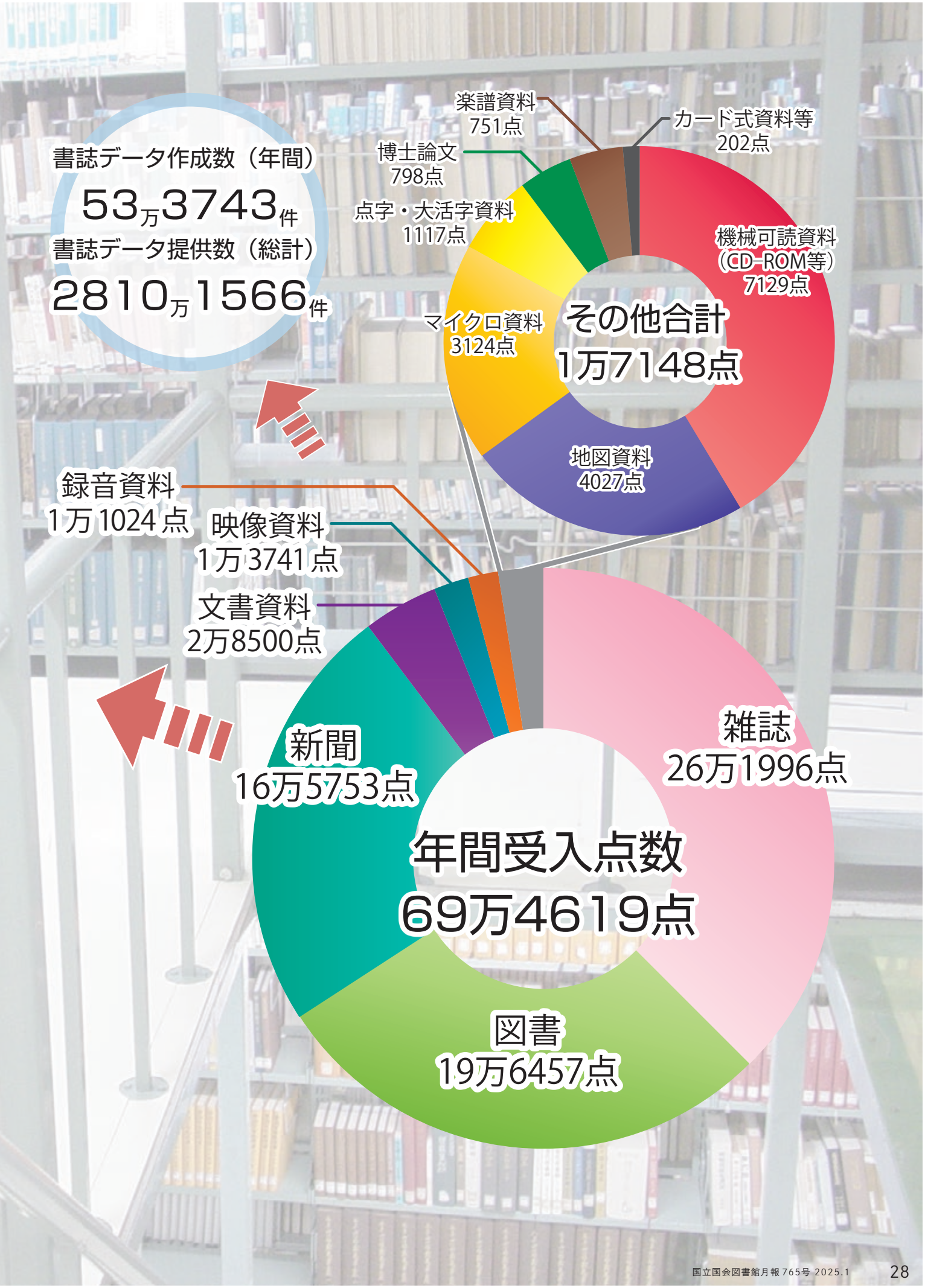
国会議員等からの依頼に基づき、国政課題や内外の諸事情に関する調査、法案の分析・評価などを行っている。

国政課題に関する調査研究
307件

行政・司法支部図書館へのサービス
貸出3344点

支部図書館制度に基づき、各府省庁および最高裁判所に支部図書館が設置されている。この図書館ネットワークをもとに、図書館サービス、資料の交換が行われている。

『国立国会図書館年報』は、ホームページでもご覧になれます。
https://www.ndl.go.jp/jp/publication/annual/index.html


書誌データ作成数（年間）
53万3743件
書誌データ提供数（総計）
2810万1566件
楽譜資料
751点
博士論文
798点
点字・大活字資料
1117点
カード式資料等
202点
機械可読資料
（CD-ROM等）
7129点
マイクロ資料
3124点
その他合計
1万7148点
地図資料
4027点
録音資料
1万1024点
映像資料
1万3741点
文書資料
2万8500点
新聞
16万5753点
雑誌
26万1996点
年間受入点数
69万4619点
図書
19万6457点

国立国会図書館サーチで
統合検索できる書誌データ

1億8494万9927件

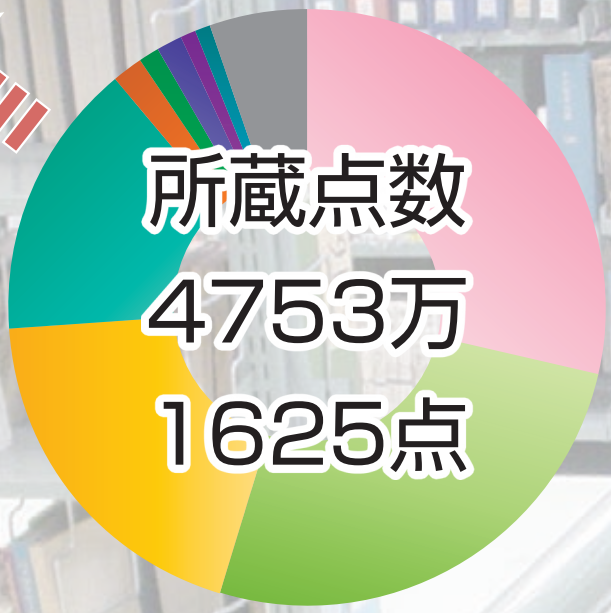
当館や他機関が保有する冊子体・デジタル化された画像・音声等の様々な形態の情報を検索できる

デジタル資料点数

インターネット提供
191万9280点

送信サービス限定提供
180万3834点
図書館・個人向けデジタル化資料送信サービスの提供データ

NDL館内限定提供
185万5509点



インターネット
資料収集保存事業
収集データ件数

25万6771件

収集データ容量

3.1PB

図書館等への貸出し

1万3949点

図書館への貸出し、小中学生向けの学校図書館セット貸出し、展示会に出品するための貸出しがある

遠隔複写

25万5806件

来館せずに申し込まれた複写件数

来館者

61万 422人

東 41万3407人
西 6万6576人
子 13万 439人

閲覧

176万7221点

東 165万7946点
西 7万7634点
子 3万1641点

来館して申し込まれた閲覧資料点数

東 東京本館
西 関西館
子 国際子ども図書館

来館複写

95万2547件

うちデジタル化資料等の
プリントアウト件数
48万8643件

来館して申し込まれた複写件数

ホームページへの アクセス

4614万8607件

インターネットを通じて、蔵書目録、国会会議録等の各種データベース、調べものに役立つ情報などが利用できる

館全体の予算・決算

歳出予算現額
約309億6670万円

決算額
約244億7886万円

前年度からの繰越額約56億5314万円
次年度への繰越額約57億6968万円

職員数

894人

男性 48.2%
女性 51.8%

管理職のうち女性の割合
約35.2%

	建物延べ面積	書庫面積	閲覧室面積
	24万6284㎡	12万 578㎡	2万5864㎡
東	14万7853㎡	7万7829㎡	1万8983㎡
国会分館	1331㎡	609㎡	562㎡
西	8万4339㎡	3万9026㎡	4265㎡
子	1万2761㎡	3114㎡	2054㎡

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2025.1

1

NO.765
JANUARY
2025

CONTENTS

New Year Greetings for 2025

03 <Book of the month - from NDL collections>
Chronological scientific tables volume 1: The very first book of a hundred years of history

08 A book that could not have been written without the National Diet Library Digital Collections

14 Let's use the full-text search of the National Diet Library Digital Collections!

16 The world of WATSUJI Tetsuro's manuscripts: Searching for the origin of "Watsuji Ethics"

27 The NDL in figures: From the Annual Report of the NDL, FY2023

24 <Tidbits of information on NDL>
Original greeting card from the National Diet Library

25 <Books not commercially available>
Oishii ukiyoeten: Hokusai hiroshige kuniyoshitachi ga egaita edo no ajiwai

26 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 川西晶大

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
https://www.ndl.go.jp/

令和7年1月号（No.765）
令和7年1月1日発行

印刷所 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（https://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

ISSN 0027-9153

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2025.1

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

国立国会図書館